

青森市埋蔵文化財調査報告書 第96集

# 葛野遺跡群

発掘調査報告書

平成 19 年度

青森市教育委員会



## 序

現在、青森市内の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は約400ヶ所を数え、各種公共事業や民間土木工事に際しては、慎重を期すとともに記録保存を前提とした発掘調査が実施されております。

このたび、市道金浜小畠沢線道路改良工事に伴い、平成18・19年度の二ヵ年に亘って、工事予定地内における葛野遺跡群の三遺跡（葛野（1）・（2）・（3）遺跡）が発掘調査されました。調査の結果、平安時代の堅穴住居跡、土坑、焼土遺構、小ピット、溝状遺構や該期の土器（土師器・須恵器）等が検出され、葛野地区に平安時代の集落跡があったことが明らかになりました。

本書は、その発掘調査成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財保護ならびに調査・研究に活用されることを願ってやみません。

本書の刊行にあたり、ご理解とご協力を賜った関係機関・関係各位に對しまして、厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

## 例　　言

1. 本書は、青森市教育委員会が発掘調査を実施した青森市大字大別内字葛野に所在する葛野遺跡群（葛野（1）遺跡・葛野（2）遺跡・葛野（3）遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 本書に記載される内容は、平成18年度（葛野（1）・（2）遺跡）および平成19年度（葛野（3）遺跡）に実施した市道金浜小畑沢線道路改良工事に係る発掘調査成果をまとめたものである。
3. 本遺跡群は、青森県埋蔵文化財包蔵地台帳に遺跡番号01217（葛野（1）遺跡）、01218（葛野（2）遺跡）、01308（葛野（3）遺跡）として登録されている。
4. 本書の執筆ならびに編集は、青森市教育委員会が行った。執筆分担は各文末に記した。
5. 出土遺物および記録図面、写真関係資料は青森市教育委員会が保管している。
6. 引用・参考文献は巻末にまとめた。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたって、次の各機関・各位からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。（敬称略・順不同）

青森県教育庁文化財保護課、青森市都市整備部道路建設課、工藤一彌

## 凡　　例

1. 採図番号および表番号、写真番号は一冊を通じて連続するものとし、「第○図」、「第○表」、「写真○」とした。
2. 遺構の略称は、S I = 竪穴住居跡、S K = 土坑、S N = 焼土遺構、S P = 小ビット、S D = 溝状遺構とした。また、竪穴住居跡内の遺構に関しては、土坑（S K）・ビット（Pit）と表記した。
3. 遺物図版には、括弧内に出土遺構あるいは出土グリッドを明記した。
4. 図中・文中で使用したアルファベットを用いた略称は、以下の通りである。  
P…土器 S…石 L B…ロームブロック B-T m…白頭山-苦小牧火山灰
5. 採図の縮尺は各図毎に示した。また、写真図版の縮尺は統一していない。
6. 土層の注記は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄1993）に準拠した。
7. 遺物実測図・遺物写真図版の縮尺は、土器・石器：1/3、土製品・錢貨：1/2である。
8. 図中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。なお、須恵器断面は黒ベタで示した。



# 目 次

序

例言・凡例

目次

図表・写真目次

第Ⅰ章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査要項.....	1
第3節 調査方法.....	3
第4節 調査経過.....	3
第Ⅱ章 遺跡群の概要.....	7
第1節 地理的・歴史的環境.....	7
第2節 周辺の遺跡.....	9
第3節 基本層序.....	10
第Ⅲ章 葛野（1）遺跡.....	13
第1節 検出遺構と出土遺物.....	13
1. 積穴住居跡.....	13
2. 土坑.....	18
3. 小ビット.....	18
4. 溝状遺構.....	20
第2節 遺構外出土遺物.....	20
1. 縄文土器.....	20
2. 土師器.....	22
3. 須恵器.....	22
第Ⅳ章 葛野（2）遺跡.....	27
第1節 検出遺構と出土遺物.....	27
1. 積穴住居跡.....	27
2. 土坑.....	31
3. 小ビット.....	33
4. 溝状遺構.....	33
第2節 遺構外出土遺物.....	33
1. 須恵器.....	33
第Ⅴ章 葛野（3）遺跡.....	39
第1節 検出遺構と出土遺物.....	39
1. 積穴住居跡.....	39
2. 土坑.....	39
3. 燃土遺構.....	42

4. 小ピット	44
5. 溝状遺構	44
第2節 遺構外出土遺物	46
1. 繩文土器	46
2. 繩文石器	46
3. 須恵器	46
4. 銭貨	46
まとめ	49
引用・参考文献	50
写真図版	51
報告書抄録	

## 図表・写真目次

### 挿図

第1図 遺跡群の位置	2
第2図 葛野（1）・（2）遺跡 グリッド設定図	4
第3図 葛野（3）遺跡 グリッド設定図	5・6
第4図 周辺の遺跡	8
第5図 葛野（1）遺跡 基本層序	10
第6図 葛野（2）遺跡 基本層序	11
第7図 葛野（3）遺跡 基本層序	11
第8図 葛野（1）遺跡 遺構配置図	12
第9図 葛野（1）遺跡 S 101-	14
第10図 葛野（1）遺跡 S 102-	14
第11図 葛野（1）遺跡 S 103-	15
第12図 葛野（1）遺跡 S 104-	16
第13図 葛野（1）遺跡 S 105-	17
第14図 葛野（1）遺跡 S 106-	17
第15図 葛野（1）遺跡 S K・S P	19
第16図 葛野（1）遺跡 S D	21
第17図 葛野（1）遺跡 S 1出土遺物	23
第18図 葛野（1）遺跡 S I・遺構外出土遺物	24
第19図 葛野（2）遺跡 遺構配置図	25・26
第20図 葛野（2）遺跡 S 101-	28
第21図 葛野（2）遺跡 S 102-	29
第22図 葛野（2）遺跡 S 103-	30
第23図 葛野（2）遺跡 S K・S D	32
第24図 葛野（2）遺跡 S P	34
第25図 葛野（2）遺跡 出土遺物（1）	35
第26図 葛野（2）遺跡 出土遺物（2）	36
第27図 葛野（3）遺跡 遺構配置図	37・38
第28図 葛野（3）遺跡 S 101出土玉	39
第29図 葛野（3）遺跡 S 101-	40
第30図 葛野（3）遺跡 S 101出土遺物	41

第31図 葛野（3）遺跡 S K・S N	43
第32図 葛野（3）遺跡 S P・S D	45
第33図 葛野（3）遺跡 遺構外出土銭貨	46
第34図 葛野（3）遺跡 S K・S N・遺構外出土遺物	47

### 表

第1表 周辺の遺跡	8
第2表 葛野（1）遺跡 小ピット観察一覧	18
第3表 葛野（1）遺跡 出土遺物観察一覧	22
第4表 葛野（2）遺跡 小ピット観察一覧	33
第5表 葛野（2）遺跡 出土遺物観察一覧	34
第6表 葛野（3）遺跡 小ピット観察一覧	44
第7表 葛野（3）遺跡 出土遺物観察一覧	48

### 写真

写真1 葛野（1）遺跡 検出遺構（1）	52
写真2 葛野（1）遺跡 検出遺構（2）	53
写真3 葛野（1）遺跡 検出遺構（3）	54
写真4 葛野（1）遺跡 出土遺物（1）	55
写真5 葛野（1）遺跡 出土遺物（2）	56
写真6 葛野（2）遺跡 検出遺構（1）	57
写真7 葛野（2）遺跡 検出遺構（2）	58
写真8 葛野（2）遺跡 検出遺構（3）	59
写真9 葛野（2）遺跡 出土遺物（1）	60
写真10 葛野（2）遺跡 出土遺物（2）	61
写真11 葛野（3）遺跡 検出遺構（1）	62
写真12 葛野（3）遺跡 検出遺構（2）	63
写真13 葛野（3）遺跡 検出遺構（3）	64
写真14 葛野（3）遺跡 出土遺物（1）	65
写真15 葛野（3）遺跡 出土遺物（2）	66

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

青森市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）は、青森市大字大別内字葛野に所在する市道金浜小畑沢線の拡幅工事を計画し、平成15年7月8日、青森市教育委員会文化財課に道路改良工事に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」を提出した。埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の位置関係を照合した結果、工事予定地が葛野（1）・（2）・（3）遺跡に該当していたことから、平成17年9月1日～9月30日の日程で確認調査を実施することとした。確認調査は、工事予定地内に任意のトレッチを76ヶ所設定し（葛野（1）遺跡：8、葛野（2）遺跡：27、葛野（3）遺跡：41）、人力による掘削および鍬籠かけを行った。調査面積は2,149m<sup>2</sup>（葛野（1）遺跡：237m<sup>2</sup>、葛野（2）遺跡：715m<sup>2</sup>、葛野（3）遺跡：1,197m<sup>2</sup>）である。

確認調査の結果、葛野（1）遺跡では平安時代の竪穴住居跡3軒、溝状遺構1条、葛野（2）遺跡では竪穴住居跡1軒、土坑2基、葛野（3）遺跡では土坑2基が検出された（青森市教育委員会2006c）。その後、道路建設課と協議を行い、平成18・19年度の2ヶ年計画で、北側の葛野（1）遺跡から順に発掘調査を実施することとなった。平成18年度は、9月12日～10月27日の日程で葛野（1）遺跡、10月30日～11月30日の日程で葛野（2）遺跡を調査した。続いて平成19年度は、8月23日～11月6日の日程で葛野（3）遺跡を調査した。

## 第2節 調査要項

### 1. 調査の目的

道路改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域における文化財の活用に資する。

### 2. 遺跡名及び所在地

葛野（1）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号 01217）

葛野（2）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号 01218）

葛野（3）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号 01308）

青森市大字大別内字葛野

### 3. 発掘調査期間

平成18年9月12日～10月27日（葛野（1）遺跡）

平成18年10月30日～11月30日（葛野（2）遺跡）

平成19年8月23日～11月6日（葛野（3）遺跡）

### 4. 調査面積

葛野（1）遺跡 589m<sup>2</sup>

葛野（2）遺跡 711m<sup>2</sup>

葛野（3）遺跡 2,887m<sup>2</sup>

### 5. 調査委託者

青森市都市整備部道路建設課

### 6. 調査受託者

青森市教育委員会事務局文化財課

### 7. 調査担当機関

青森市教育委員会事務局文化財課

### 8. 調査指導機関

青森県教育庁文化財保護課



第1図 遺跡群の位置

(S=1:50,000)

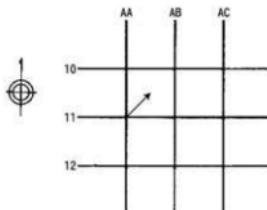
## 9. 調査体制 調査事務局 青森市教育委員会

教育長	角田詮二郎	文化財主事	小野 貴之
教育部長	古山 善猛	"	児玉 大成(調整担当)
次長	相馬 政美	"	設楽 政健(調査担当)
主幹	遠藤 正夫	主事	越谷美由紀(庶務担当)
文化財主査	多田 弘仁(平成18年度)	"	竹ヶ原亜希( " )
	藤村 和人(平成19年度)	"	田中 浩司( " )
	木村 淳一(文化財主事)	埋蔵文化財調査員	野坂 知広

## 第3節 調査方法

調査区は、市道金浜小畠沢線道路沿いにあたるため、ほぼ南北に蛇行する細長い形状を呈している。公共座標に基づく任意の起点から、調査区全体が網羅されるように4×4mのグリッドを設定した。グリッドの呼称は、東側に向かってAA、AB、AC、AD・・・の順にアルファベット、南側に向かって1、2、3、4・・・の順に算用数字を付し、両者の組み合わせで示した。測量原点は付近に適当な基準点が存在しなかつたため、流通団地付近の三角点(標高31.20m)より移動を行った。

(例) AA-11グリッド

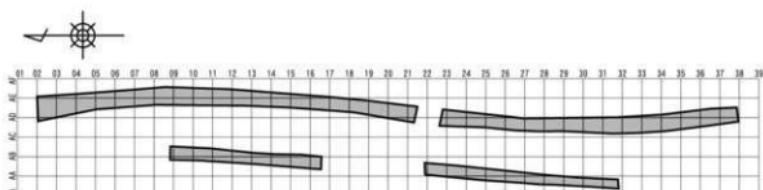


## 第4節 調査経過

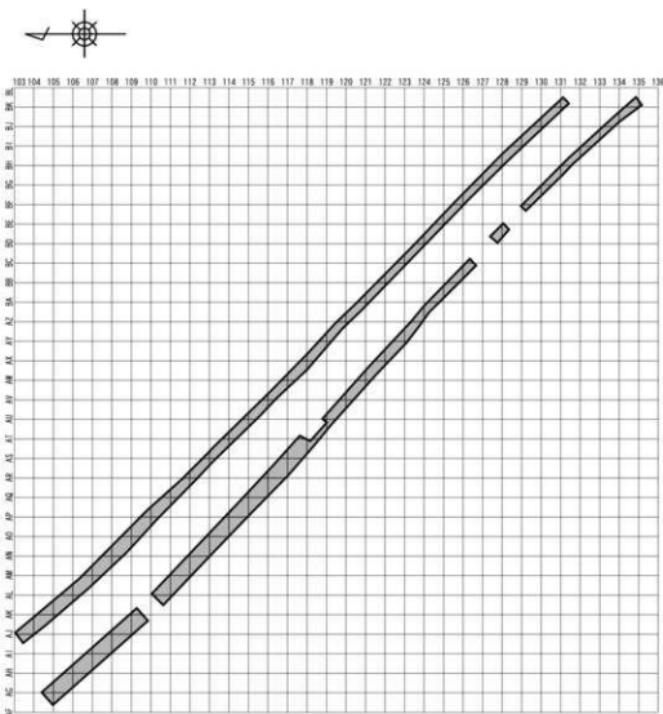
平成18年9月12日、葛野(1)遺跡の調査開始。重機による遺構確認面までの掘削を行い、その後、鋤籠がけにより遺構確認を行った。遺構精査は時間を要する竪穴住居跡を優先し、続いて溝状遺構・土坑・小ビットの順に行つた。また、10月30日からは葛野(2)遺跡の調査を開始し、11月30日までに全ての作業を終了した。

平成19年8月23日、葛野(3)遺跡の調査開始。測量調査と併行して重機による遺構確認面までの掘削を行い、その後、鋤籠がけにより遺構確認を行つた。遺構精査はやはり竪穴住居跡を優先し、溝状遺構・土坑・小ビットの順に行つた。11月6日に全ての作業を終了し、機材・プレハブ等を撤収した。

(設楽 政健)

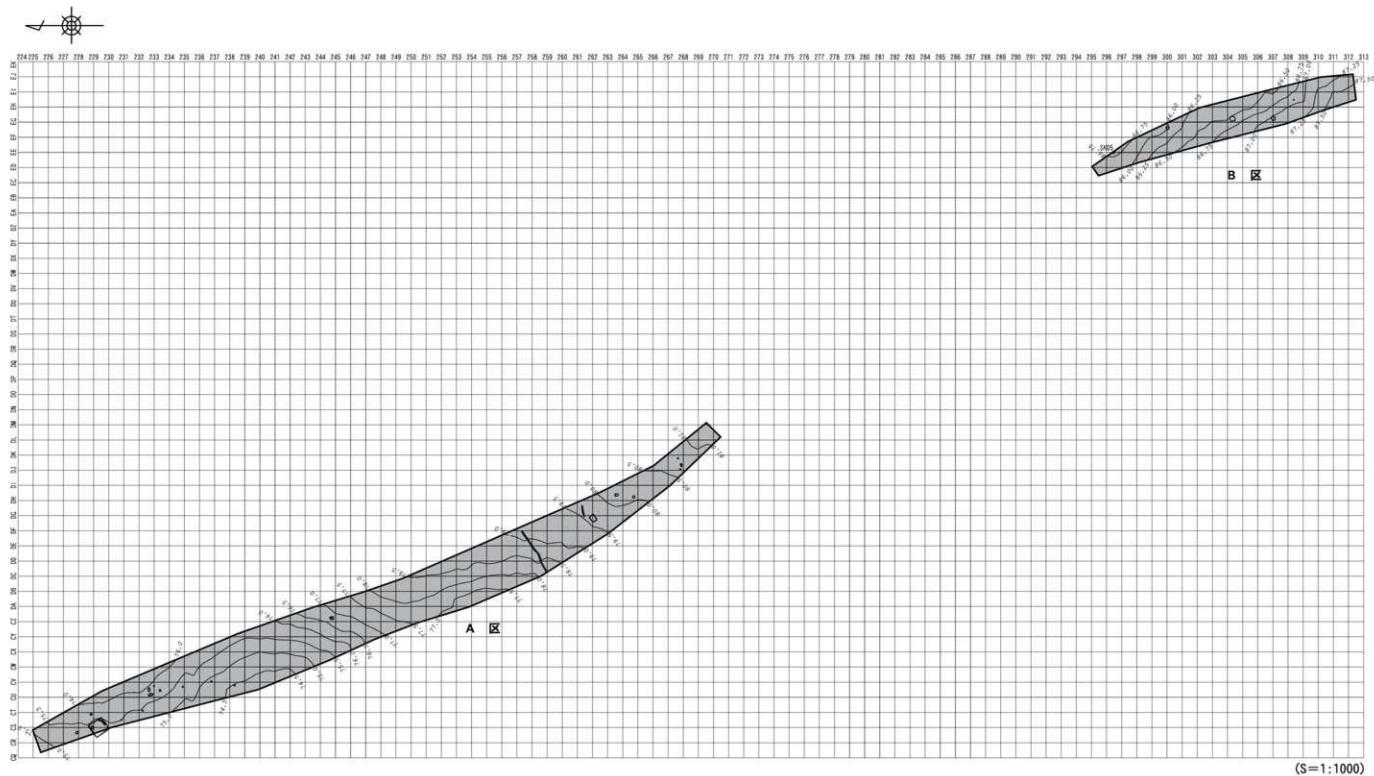


葛野(1)遺跡 (S=1:1000)



葛野(2)遺跡 (S=1:1000)

第2図 葛野(1)-(2)遺跡 グリッド設定図



第3図 葛野（3）遺跡 グリッド設定図

## 第II章 遺跡群の概要

### 第1節 地理的・歴史的環境

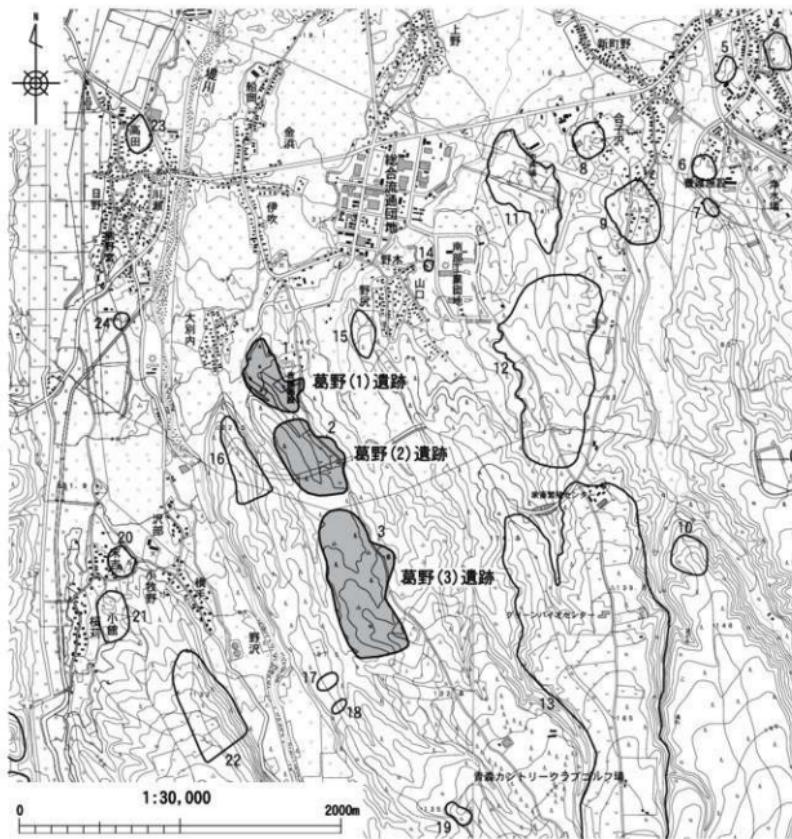
葛野遺跡群と便宜上呼称した3遺跡（葛野（1）・（2）・（3）遺跡）は、青森市大字大別内字葛野地内に所在する。各遺跡は、市南部に広がる火山性台地（微高丘陵）周縁の緩斜面上に占地し、海岸線から約9km内陸に位置している。西には荒川が北流し、陸奥湾へと注ぐ。現在、遺跡群一帯は山林であり、表土には黒色土が堆積する。本調査において地山とした黄褐色ローム層は、青森市域に広範に分布する月見野火山灰層と思われ、直下に堆積する赤褐色粘土質ローム層は大谷火山灰層に比定される。

葛野（1）遺跡は標高50m内外、葛野（2）遺跡は標高60m内外、葛野（3）遺跡は標高80m内外にあり、その範囲内を市道金浜小畠沢線が縱走する。同線沿いには、福祉施設なども建ち並ぶが、おおむね山林と畑地であり、山間の農村地帯の様相を呈する。八甲田方面へ南進した先には、八甲田雲霧と広大な敷地を持つゴルフ場があり、細い道路でありながら交通量が多い。

「葛野」の地名は、すでに「貞享4年検地水帳」（1687年）に旧大別内村の小字名として記述がある。旧大別内村は水田よりも畑が多い地域であったが、林産業も盛んで、明治期には薪炭が行われていたようである。また、「荒川村沿革誌」（小友1956）によると、葛野周辺では「元刑務所の畑より大別内字葛野通称赤すらに至る一帯の区域」が遺跡として挙げられ、「石土器を発掘するのみならず、未製品の石器は山積する所あり、…城址は現存せり」と伝えている。これらの場所が、現在の登録遺跡とどのように合致するのかは詳らかでないが、葛野（1）遺跡や隣接する山吹（4）遺跡は丘陵先端に立地しており、中世の城館跡が埋もれている可能性もある。特に、葛野（1）遺跡周辺の林檎園には城跡があると地元住民に言い伝えられており、安藤氏一族が拠ったとの伝説もある。ちなみに、赤すらの「すら」は、方言で傾斜している場所のことを指すといい、地山ロームのことを地元では“あかつち”と呼ぶことから、地山が露出した斜面を意味するものと思われる。

平成8年（1996）と平成10年（1998）には、県営高田地区農免農道整備事業に伴い、葛野（2）遺跡が発掘調査されている。平成8年度の調査においては、竪穴住居跡4軒、竪穴遺構1基、土坑5基、道路状遺構3条を検出し、本遺跡が平安時代の集落跡を主体とすることが判明した（青森市教育委員会1997）。平成10年度の調査においても、竪穴住居跡16軒、竪穴遺構1基、土坑48基、小ピット2基が検出され、ほぼ同様の発掘成果が得られている（青森市教育委員会1999）。平安時代の竪穴住居跡は、南壁あるいは南東壁にカマドを持つが、おそらく住居入口がカマド脇に設置され、太陽光を意識した方角に作られたためと思われる。報告書において想定された遺跡の主体時期は10世紀初頭～前葉であり、今年度の調査成果とも齟齬はない。竪穴遺構からは土玉が出土しており、遺構・遺物とともに本調査との類似傾向が窺える。

また、平成12年（2001）～平成15年（2004）に亘って、八甲田雲霧第2期造成工事に伴い、葛野（3）遺跡が発掘調査されている。調査区をA～Dの4区に分けて実施され、縄文時代と平安時代を主体とする竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡1軒、円形周溝1基、溝状遺構6条、土坑157基、鐵治炉1基、焼土遺構3基、小ピット64基、埋設土器遺構2基と膨大な量の遺構・遺物が検出された。



第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡番号	遺跡名	所 在 地	時 期	文 献
1	01216	葛野(1)遺跡	大字大網町字葛野	平安、朝文	青森市教育委員会2006c
2	01217	葛野(2)遺跡	大字大網町字葛野	平安、朝文	青森市教育委員会1992・1999・2006c
3	01308	葛野(3)遺跡	大字大網町字葛野	平安	青森市教育委員会2006c
4	01174	桶内城跡	大字桶内字桶井	中世、朝文	青森市教育委員会1987
5	01293	桶内(1)遺跡	大字桶内字桶井	平安	
6	01164	桶内(2)遺跡	大字合川字桶内山崎	朝文	青森市教育委員会1995
7	01294	桶内(3)遺跡	大字合川字桶内	平安	青森市教育委員会1995
8	01361	合子沢松森(1)遺跡	大字合子沢字松森	朝文	
9	01362	合子沢松森(2)遺跡	大字合子沢字松森	平安	青森市教育委員会2007b
10	01312	合子沢松森(3)遺跡	大字合子沢字松森	平安	
11	01161	新町野遺跡	大字新町野字谷谷	朝文(前・後)・平安	青森県教育委員会1998・2000a、青森市教育委員会1998a・2001・2006b
12	01310	野木(1)遺跡	大字野木(1)字口	平安、朝文	青森県教育委員会1998・1999・2000b、青森市教育委員会1998b・2001
13	01271	(d1)遺跡	大字野木(2)字口	朝文(前・後)	
14	01259	野木(2)遺跡	大字野木(2)字口	平安	
15	01216	野木沢田原跡	大字野木(3)字田原	平安	
16	01237	山吹(1)遺跡	大字大網町字山吹	平安	
17	01186	山吹(1)遺跡	大字大網町字山吹	朝文(小)	青森市教育委員会1991
18	01187	山吹(2)遺跡	大字大網町字山吹	朝文	
19	01188	山吹(3)遺跡	大字大網町字山吹	朝文	
20	01172	小船遺跡	大字小船字桶井	中世	青森県教育委員会1983
21	01159	桙原(2)遺跡	大字小船字桶井	朝文	
22	01176	小牧野遺跡	大字野沢字小牧野	平安(後)	青森市教育委員会2006aほか
23	01170	舟出山遺跡	大字高浜字舟出山	中世	
24	01238	川越遺跡	大字高浜字川越	平安	

## 第2節 周辺の遺跡

本遺跡群が所在する火山性台地（微高丘陵）一帯は、横内川・合子沢川・牛館川・荒川などの河川によって浸食され、それぞれ舌状台地を形成している。これらの地域には、縄文早期から中世にいたるまで数多くの遺跡が点在し、発掘調査が実施された遺跡も少なくない。

横内城跡は、昭和61年度（1986）、寺院改築（朝日山常福院）により当委員会の発掘調査が行われ、城館の縄張りを確認したほか、竪穴造構、陶磁器、古銭などを検出している（青森市教育委員会1987）。横内（1）遺跡は、平成6年度（1994）、道路建設に伴う当委員会の発掘調査が行われ、縄文時代前期中葉～後葉の竪穴住居跡3軒を検出した。縄文時代前期中葉の竪穴住居跡はテラス状造構を持ち、他の遺跡事例や出土遺物などから石器製作場所と推定されている。続けて調査された横内（2）遺跡では、平安時代（10世紀前半）の竪穴住居跡1軒、縄文時代（中期前半主体）の土坑26基、時期不明の溝状造構2条が検出されている（青森市教育委員会1995）。特に、竪穴住居跡カマドからは、土師器底部を利用した転用支脚が二個並んで検出され、本調査における葛野（3）遺跡第1号竪穴住居跡カマドに類似するものとして注目されよう。

合子沢松森（2）遺跡は、平成16・17年度（2004・2005）に亘って、新幹線建設に先立つ当委員会の発掘調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡や土師器・須恵器のほか、3重に重なる円形周溝、類例の少ない土師器合口甕棺などが出土している（青森市教育委員会2007b）。

新町野遺跡は、平成7～10年度（1995～1998）に県埋蔵文化財調査センターが、平成8～10年度（1996～1998）および15～18年度（2003～2006）に当委員会が発掘調査を行い、縄文前～中期の竪穴住居跡や多量の土器・石器、平安時代の竪穴住居跡や円形周溝などを検出した（青森市教育委員会1998a・2001・2006b）。

野木（1）遺跡は、平成7～10年度（1995～1998）に県埋蔵文化財調査センターが、平成9・10年度（1997・1998）に当委員会が発掘調査を行っている。500軒近くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、新町野・野木一帯に平安時代の大集落があったことが判明した。他にも土坑、製鉄炉、畝状造構、水場遺構等を検出し、縄文土器・土師器・須恵器・鉄製品・土製品・石製品等の遺物が多量に出土している。特に、県内初の便所遺構やロクロ回転盤など特筆すべき発見が多く、全国的にも注目を集めている（青森市教育委員会1998b・2001）。

山吹（1）遺跡は、平成2年度（1990）に当委員会が発掘調査を実施しており、石壠炉を持つ竪穴住居跡など縄文時代中期中葉の集落跡の一部を検出している。また、縄文時代前期末葉～後期前葉に至る該期の土器群が出土している（青森市教育委員会1991）。

小牧野遺跡は、昭和60年度（1985）の当委員会による調査を契機に、平成元年度（1989）に青森山田高等学校が、平成2年度（1990）以降は当委員会が平成17年度（2005）の第16次調査まで継続して学術調査を行った。縄文後期の大規模な土地造成を伴う環状列石や配石造構、複数の土器棺墓、土製品・石製品など多量の遺構・遺物が出土している。環状列石の石組方法は“小牧野式”と呼称されており、秋田県北秋田市伊勢堂岱遺跡等においても同様の配石が部分的にみられる。これら一連の調査成果により、小牧野遺跡は平成7年（1995）、国史跡に指定された（青森市教育委員会2006aほか）。

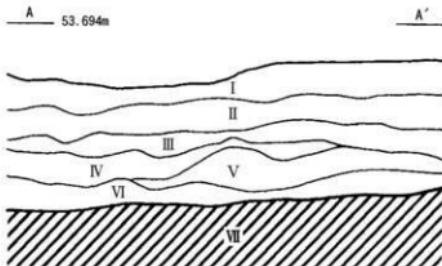
### 第3節 基本層序

今回の調査区は、3遺跡ともに市道金浜小畠沢線の道路沿いに占地しており、基本層序も類似している。葛野（1）遺跡ではA FラインのNo.7・8間を、葛野（2）遺跡ではA JラインのNo.104・105間を、葛野（3）遺跡ではC YラインのNo.238・239間を基本層序とした。層序の内容は以下の通りである。

（稻垣森太・野坂知広）

#### 葛野（1）遺跡

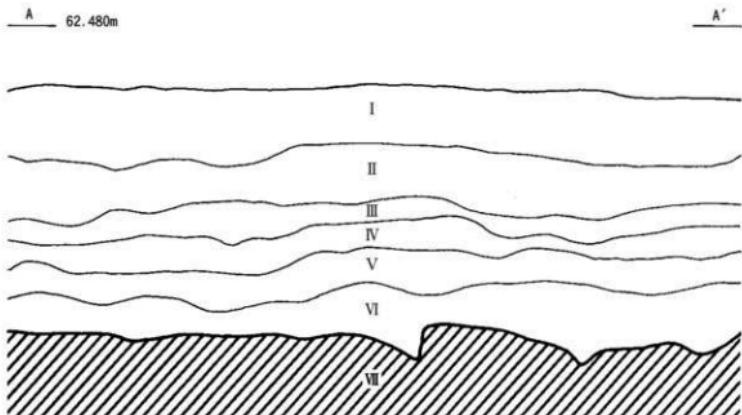
- |                       |   |
|-----------------------|---|
| 第I層 黒褐色土 (10YR 2/2)   | 表土を一括する。  |
| 第II層 黒褐色土 (10YR 2/2)  | ローム粒少量、炭化物微量。   |
| 第III層 黒褐色土 (10YR 2/3) | ローム粒少量。   |
| 第IV層 黒褐色土 (10YR 3/2)  | ローム粒少量。   |
| 第V層 黒褐色土 (10YR 2/2)   | ローム粒微量、炭化物微量。   |
| 第VI層 暗褐色土 (10YR 3/3)  | ローム粒少量、炭化物微量。   |
| 第VII層 褐色土 (10YR 4/6)  | 地山を一括する。上位に黄褐色ローム（月見野火山灰層）、下位に赤褐色粘土質ローム（大谷火山灰層）が堆積する。 |



第5図 葛野（1）遺跡 基本層序

#### 葛野（2）遺跡

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| 第I層 黒褐色土 (10YR 2/3)   | 表土を一括する。  |
| 第II層 黒色土 (10YR 2/1)   | ローム粒微量。   |
| 第III層 黒褐色土 (10YR 2/2) | ローム粒微量。   |
| 第IV層 黒褐色土 (10YR 2/2)  | ローム粒微量。   |
| 第V層 黒褐色土 (10YR 2/3)   | ローム粒微量。   |
| 第VI層 暗褐色土 (10YR 3/3)  | 漸移層。  |
| 第VII層 褐色土 (10YR 4/6)  | 地山を一括する。上位に黄褐色ローム（月見野火山灰層）、下位に赤褐色粘土質ローム（大谷火山灰層）が堆積する。 |



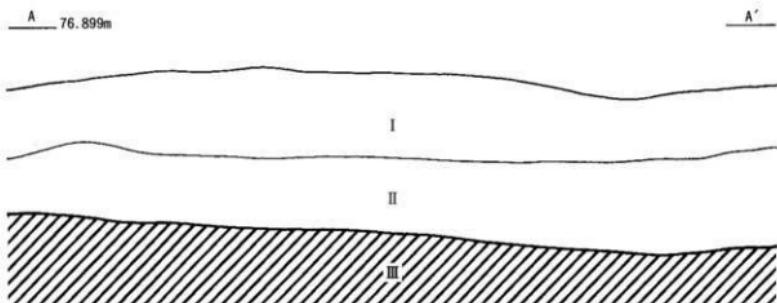
第6図 葛野(2)遺跡 基本層序

## 葛野(3)遺跡

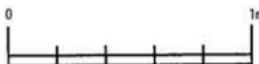
第I層 黒色土 (10YR 1.7/1) 表土を一括する。

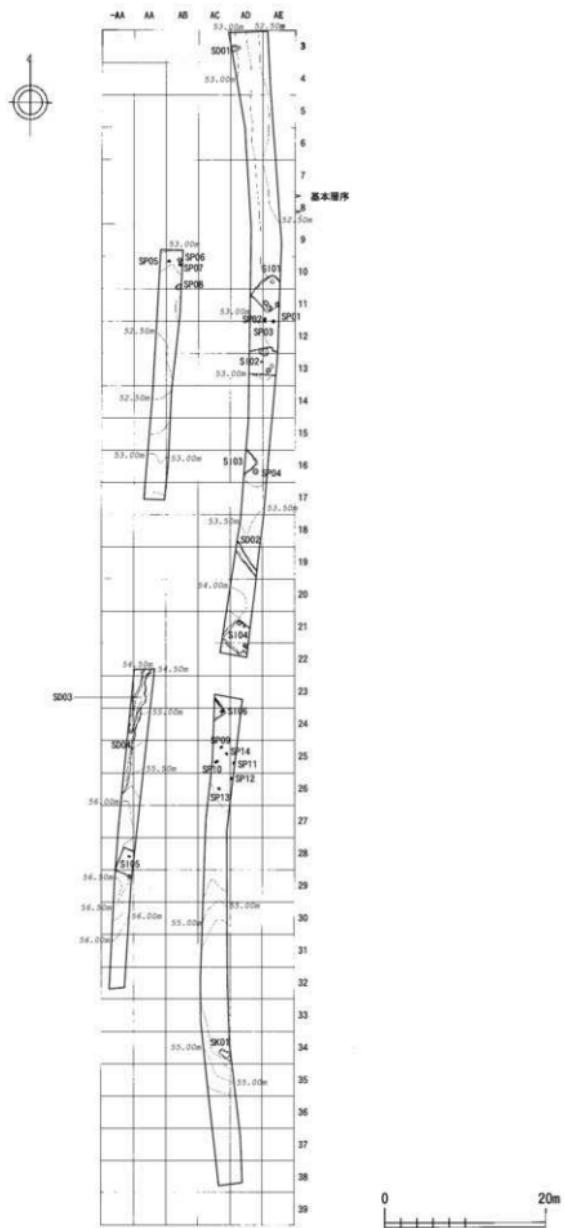
第II層 黒褐色土 (10YR 2/3) ローム粒多量、炭化物微量。

第III層 褐色土 (10YR 4/6) 地山を一括する。上位に黄褐色ローム(月見野火山灰層)、下位に赤褐色粘土質ローム(大谷火山灰層)が堆積する。



第7図 葛野(3)遺跡 基本層序





第8図 葛野(1)遺跡 遺構配置図

## 第III章 葛野（1）遺跡

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 穫穴住居跡（S I）

##### 第1号竪穴住居跡（第9図）

A D・A E-10・11グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、住居東端部分は調査区外に広がっている。規模は長軸375cm、短軸370cmを測り、深さは30cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。北東壁にわずかに掘り込まれた棚状遺構（幅20cm、深さ3cm）が検出されたが、その性格は不明である。覆土は7層に分層したが、第7層は地山ローム（第VII層）に炭化物が微量に混在する貼床と思われる。第1層～第6層は擂鉢状に堆積しており、自然堆積と判断される。

床面よりピット4基が検出され、ピット1（Pit 1）は長軸48cm×短軸45cm×深さ23cm、ピット2（Pit 2）は長軸74cm×短軸55cm×深さ10cm、ピット3（Pit 3）は長軸69cm×短軸48cm×深さ20cm、ピット4（Pit 4）は長軸52cm×短軸47cm×深さ12cmを測る。ピット2の覆土には焼土が多く含まれ、当初、本住居跡のカマド火床面の痕跡かとも思ったが、カマドは調査区外の南東壁にあるものと推定される。

出土遺物は、土師器甕が2点（第17図1・2）と砥石が2点（第17図3・4）あり、うち第17図2の土師器甕はピット3覆土より検出された。所産時期は、おおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

##### 第2号竪穴住居跡（第10図）

A D・A E-12・13グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、東壁に張出部を有する。東西両端は調査区外に広がっており、規模は長軸342cm、短軸338cm、深さ20cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は10層に分層したが、第9層は地山ローム（第VII層）に黒褐色土の混在する貼床と思われ、第10層は木根などによる搅乱と推定される。第1層～第8層は自然堆積と考えられる。

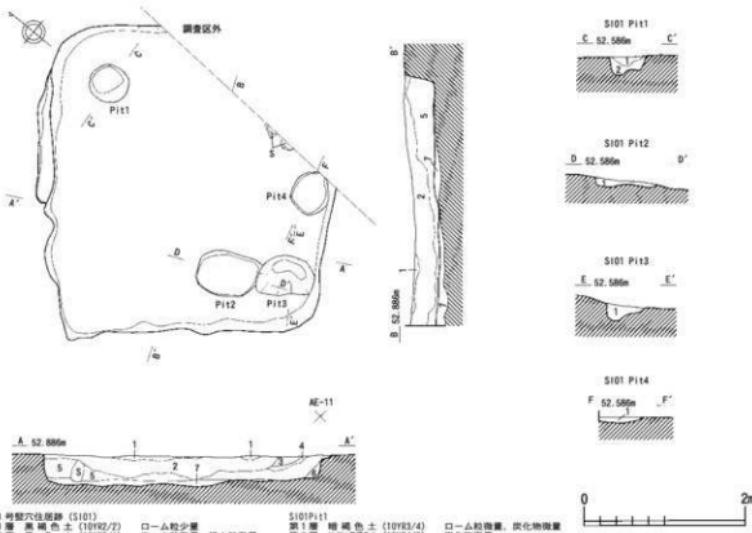
床面よりピット3基が検出され、ピット1（Pit 1）は長軸56cm×短軸50cm×深さ13cm、ピット2（Pit 2）は長軸34cm×短軸19cm×深さ8cm、ピット3（Pit 3）は長軸108cm×短軸87cm×深さ21cmを測る。また、床面東側よりカマド火床面と推定される焼土痕を検出した。袖部の痕跡などは確認されず、カマドの様相は不明である。

出土遺物は、ロクロ整形の明瞭な土師器甕が1点（第17図5）あり、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

##### 第3号竪穴住居跡（第11図）

A D-16グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、東側の大部分が調査区外に広がっている。規模は長軸220cm、短軸210cmを測り、深さは45cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。カマドなどは、調査区外に位置しているものと推定される。覆土は19層に分層したが、第19層は地山ローム（第VII層）に黒色土の混在する貼床と思われる。第1層～第18層は自然堆積と推定される。

出土遺物はないが、住居の形態や周辺遺構などから、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）



第9図 葛野(1)遺跡 S101

第1号縫穴住居跡 (S101)	
第1層 細褐色土 (10YR2/2)	ローム粒少量
第2層 細褐色土 (10YR2/1)	ローム粒微量、礫土粒微量
第3層 細褐色土 (10YR2/2)	ローム粒微量、炭化物微量
第4層 細褐色土 (10YR3/2)	ローム粒微量、炭化物微量
第5層 細褐色土 (10YR3/4)	ローム粒微量、炭化物微量
第6層 細褐色土 (10YR4/5)	粘土、炭化物微量
第7層 細褐色土 (10YR4/6)	粘土、炭化物微量

S101 Pit 11	
第1層 暗褐色土 (10YR3/4)	ローム粒微量、炭化物微量
第2層 にじく黄褐色土 (10YR4/3)	ローム粒微量
第3層 暗褐色土 (10YR3/4)	炭化物微量
第4層 暗褐色土 (5YR4/4)	粘土微量、炭化物微量
第5層 暗褐色土 (7.5YR3/4)	粘土微量、炭化物微量
第6層 暗褐色土 (7.5YR4/4)	粘土ブロック中量、炭化物微量

S101 Pit 14	
第1層 暗褐色土 (7.5YR4/4)	粘土ブロック中量、炭化物微量

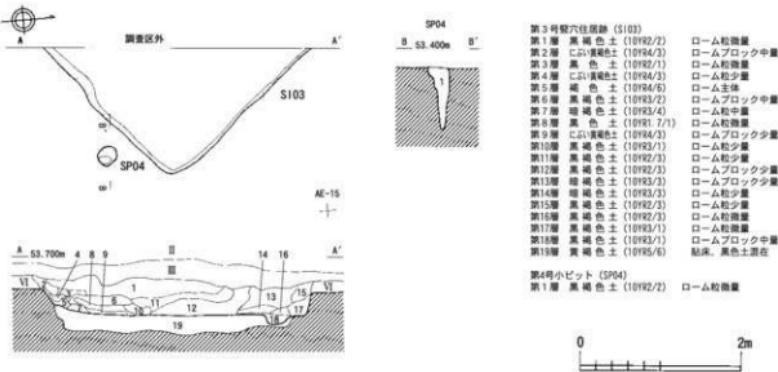
第2号縫穴住居跡 (S102)	
第1層 暗褐色角灰土 (10YR2/2)	ローム粒微量
第2層 暗褐色角灰土 (10YR2/1)	ローム粒微量
第3層 暗褐色角灰土 (10YR2/2)	ローム粒微量
第4層 暗褐色角灰土 (10YR2/3)	ローム粒微量
第5層 暗褐色角灰土 (10YR2/5)	ローム粒微量
第6層 暗褐色角灰土 (10YR3/3)	ローム粒微量

S102 Pit 11	
第1層 暗褐色土 (10YR2/3)	ローム粒微量
第2層 暗褐色土 (10YR3/3)	粘土ブロック中量、炭化物微量
第3層 暗褐色土 (7.5YR3/4)	ローム粒微量、炭化物微量

S102 Pit 12	
第1層 暗褐色土 (7.5YR3/4)	ローム粒微量

S102 Pit 13	
第1層 暗褐色土 (7.5YR3/4)	ローム粒微量
第2層 暗褐色土 (10YR2/3)	粘土ブロック中量、炭化物微量
第3層 暗褐色土 (10YR3/3)	ローム粒微量

第10図 葛野(1)遺跡 S102



第11図 葛野(1) 遺跡 SI03

に比定されよう。

#### 第4号竪穴住居跡（第12図）

AC・AD-21・22グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、住居東端が調査区外に広がっている。規模は長軸335cm、短軸313cmを測り、深さは50cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。また、北西壁付近の覆土上層より炭化木材が検出されている。覆土は10層に分層したが、住居の半域以上に現代盛土と思われる擾乱が見られる。第1層～第10層はおおむね自然堆積と推定されよう。第5層およびカマド覆土第9層にはB-Tm火山灰が堆積しており、住居廃絶後、一定期間を経てから火山灰が降り積もったことが分かる。

床面よりピット3基が検出され、ピット1 (Pit 1) は長軸40cm×短軸36cm×深さ12cm、ピット2 (Pit 2) は長軸30cm×短軸28cm×深さ12cm、ピット3 (Pit 3) は長軸52cm×短軸47cm×深さ15cmを測る。

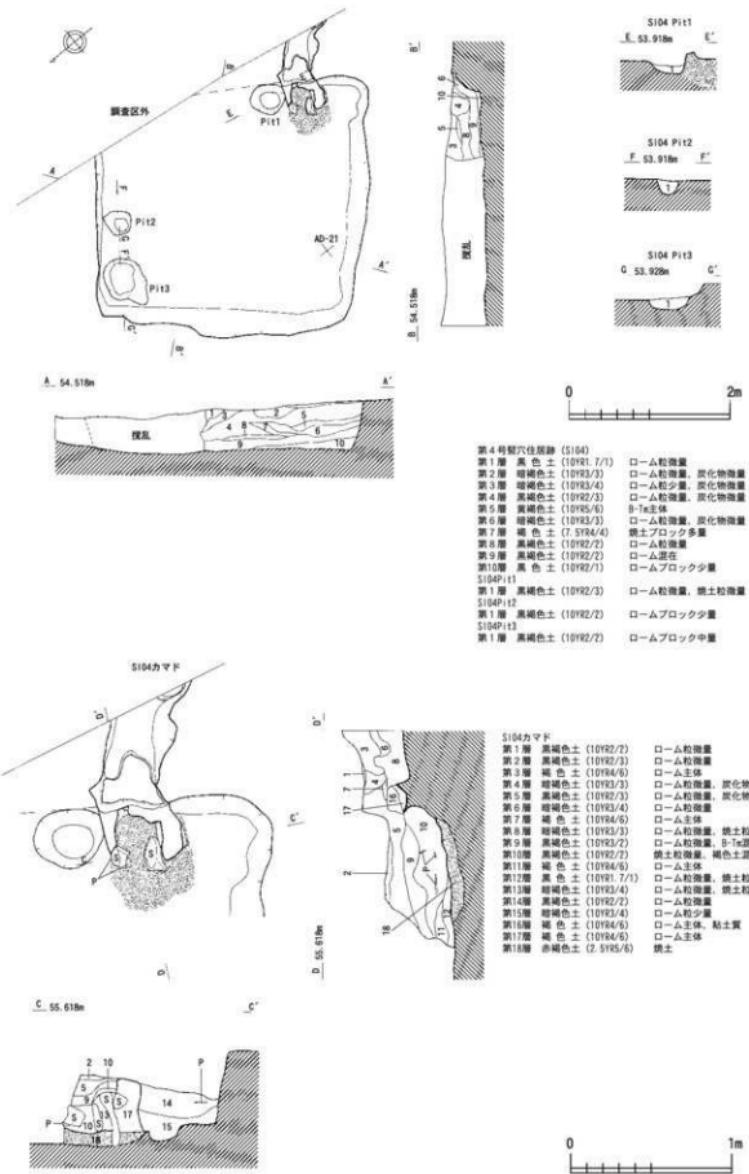
カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向 (N-135° - E) にある。煙道は半地下式で構築され、最大長90cm、最大幅42cmを測る。火床面周辺に袖石と思われる礫が残存していた。

出土遺物は、土師器甕が4点 (第17図6～9)、製塙土器が1点 (第17図10)、流れ込みと思われる縄文土器が1点 (第17図11) あり、うち第17図6・8・9はカマド周辺からの出土である。製塙土器は底部に柱目痕が観察され、いわゆる白砂式製塙土器 (北林1969) と呼称されているものである。B-Tm火山灰の堆積状況などから、所産時期はおおむね平安時代中頃 (10世紀初頭～前葉) に比定されよう。

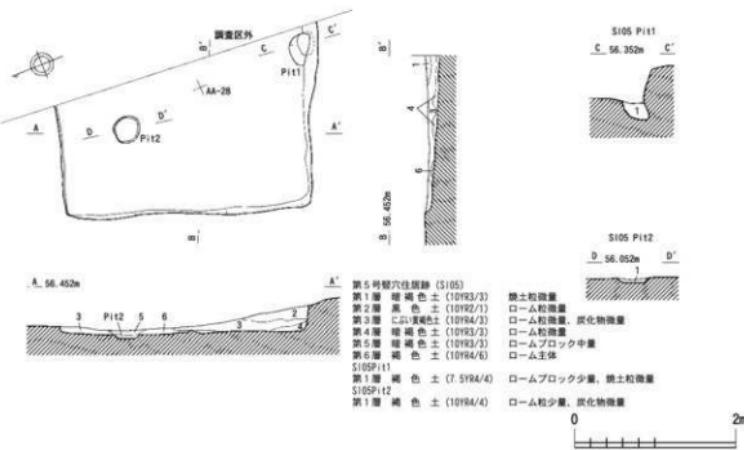
#### 第5号竪穴住居跡（第14図）

- AA-28・29グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、東側部分が調査区外に広がっている。規模は長軸315cm、短軸185cmを測り、深さは30cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は6層に分層したが、第6層以外は自然堆積と推定される。

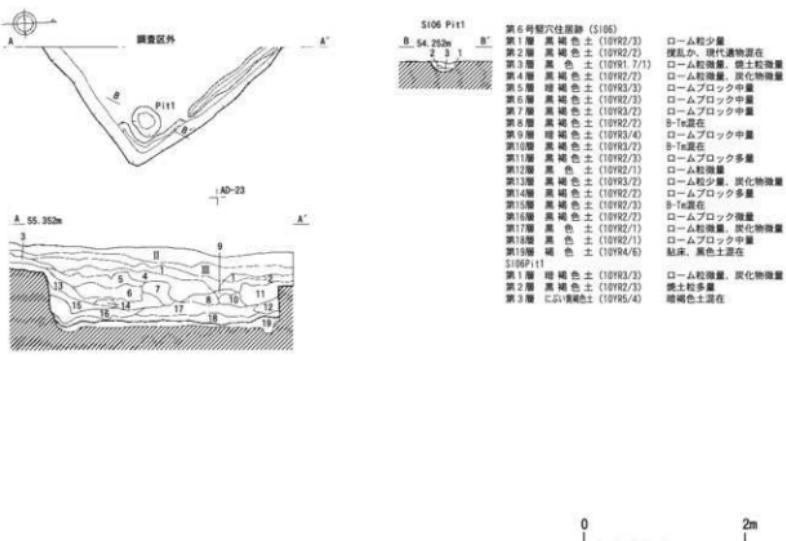
床面よりピット2基が検出され、ピット1 (Pit 1) は長軸38cm×短軸25cm×深さ22cm、ピット2 (Pit 2) は長軸34cm×短軸32cm×深さ5cmを測る。カマド等は検出されず、調査区外に残されているものと思われる。出土遺物はないが、所産時期はおおむね平安時代中頃 (10世紀前半) に比定されよう。



第12図 葛野(1)遺跡 S104



第13図 葛野（1）遺跡 S105



第14図 葛野（1）遺跡 S106

**第6号竪穴住居跡（第14図）**

A C-23・24グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、住居西側の大部分が調査区外に広がっている。規模は長軸205cm、短軸150cmを測り、深さは65cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東壁床面に壁溝が確認された。覆土は19層に分層したが、第19層は地山ローム（第VII層）に黒色土の混在する貼床と推定される。第1層～第18層は自然堆積と思われ、第8層・第10層・第15層には、B-Tm火山灰が混在している。

床面よりピット1基が検出され、ピット1（Pit 1）は長軸37cm×短軸31cm×深さ11cmを測る。カマドは検出されず、調査区外に残されているものと思われる。

出土遺物は、土師器甕が2点（第18図12・13）、須恵器壺が1点（第18図14）ある。B-Tm火山灰の堆積状況などから、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

**2. 土坑（SK）****第1号土坑（第15図）**

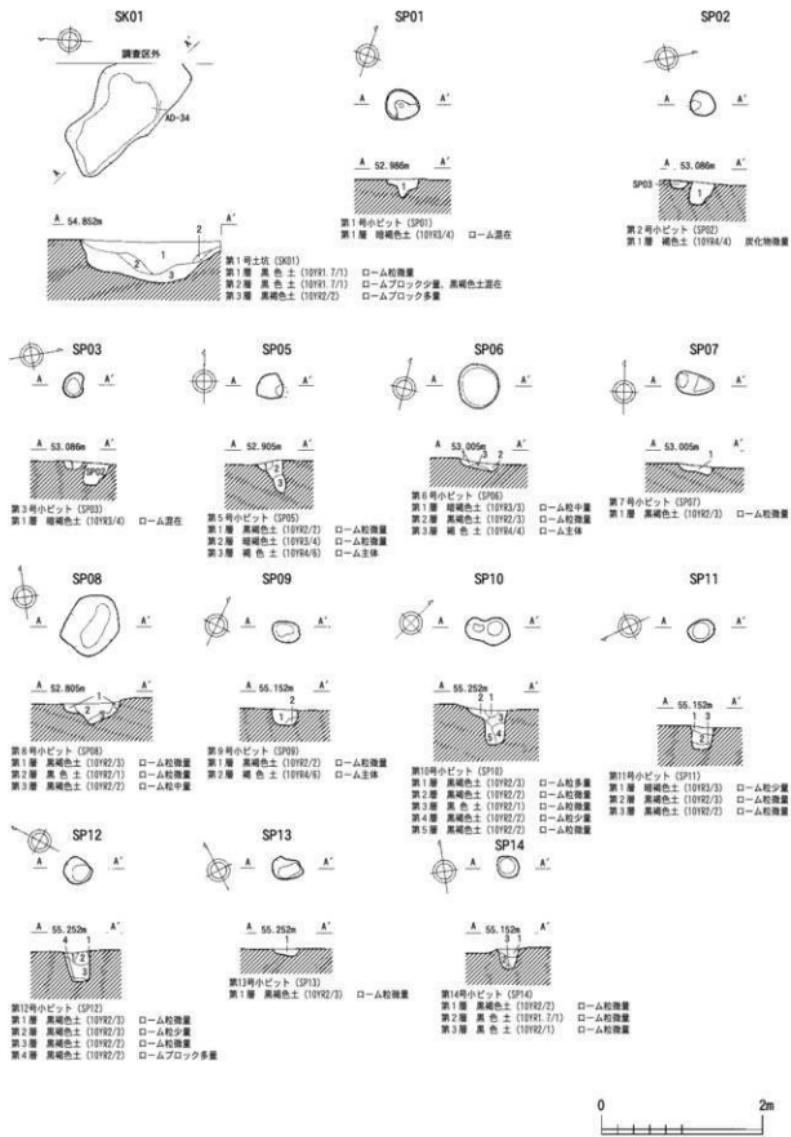
A C・AD-34グリッドに位置する。平面形はおおむね不整長方形を呈し、東端が調査区外に広がっている。壁面は急角度に立ち上がり、規模は長軸175cm、短軸93cm、深さ50cmを測る。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

**3. 小ピット（SP）**

本遺跡からは柱穴状の小ピットが14基検出された（第15図）。出土遺物はなく、その所産時期は不明である。配列の明確なものも確認できなかった。計測値等は観察表に纏めた（第2表）。

**第2表 葛野（1）遺跡小ピット観察一覧**

構造番号	図版番号	位置（グリッド）	平面形	規模(cm)		
				長軸	短軸	深さ
S P 01	第15図	A E-12	楕円形	40	35	21
S P 02	第15図	A E-11	不整円形	30	29	27
S P 03	第15図	A E-12	不整楕円形	31	23	11
S P 04	第15図	AD-16	楕円形	25	24	76
S P 05	第15図	A B-10	不整形	32	30	40
S P 06	第15図	A B-10	楕円形	53	50	8
S P 07	第15図	A B-10	長楕円形	46	26	9
S P 08	第15図	A B-10	不整形	75	62	25
S P 09	第15図	A C-25	不整楕円形	32	26	19
S P 10	第15図	A C-25	不整形	54	34	43
S P 11	第15図	AD-25	不整楕円形	33	25	28
S P 12	第15図	AD-26	隅丸方形	34	32	35
S P 13	第15図	AC-26	不整形	35	25	10
S P 14	第15図	AC-25	隅丸方形	27	26	25



第15図 葛野（1）遺跡 SK・SP

#### 4. 溝状遺構 (SD)

##### 第1号溝状遺構 (第16図)

A D - 3 グリッドに位置する。平面形は舌状を呈し、西側部分は調査区外に広がっている。規模は最大長1.1m、最大幅0.8mを測り、深さは0.3mである。壁面はゆるやかに立ち上がり、長軸方向は西 (N - 110° - W) にある。覆土は3層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物はないが、層序観察を参考にすると、竪穴住居跡と同じ所産時期が推定されよう。

##### 第2号溝状遺構 (第16図)

A D - 18・19グリッドに位置する。平面形は細長い直線状を呈し、東西両側が調査区外に延びている。規模は最大長3.9m、最大幅0.75mを測り、深さは0.6mである。壁面は急角度に立ち上がり、長軸方向は北西 (N - 32° - W) にある。覆土は7層に分層したが、底面に近い第5層にB-T m火山灰が堆積しており、本遺構の焼絶直後に降下したものと考えられる。出土遺物はないが、所産時期はおおむね平安時代中頃 (10世紀初頭～前葉) に比定されよう。

##### 第3号・第4号溝状遺構 (第16図)

- A A - A A - 22～26グリッドに位置する。第3号溝状遺構が古く、第4号溝状遺構が新しい。平面形は不整形を呈すがおおむね直線状であり、北側が調査区外に延びている。規模は第4号溝状遺構が大きい。第3号溝状遺構は最大長8.2m、最大幅1.6mを測り、深さは0.45mである。第4号溝状遺構は最大長15.4m、最大幅1.4mを測り、深さは0.25mである。両溝状遺構は、断面形に差異があり、直線的で急角度に立ち上がる第3号溝状遺構と、ゆるやかに立ち上がる第4号溝状遺構の相違が明瞭である。ともに長軸方向は北 (N - 15° - E) にある。覆土は4～7層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物はなく、竪穴住居跡とも離れた位置にあるため、その所産時期は不明である。

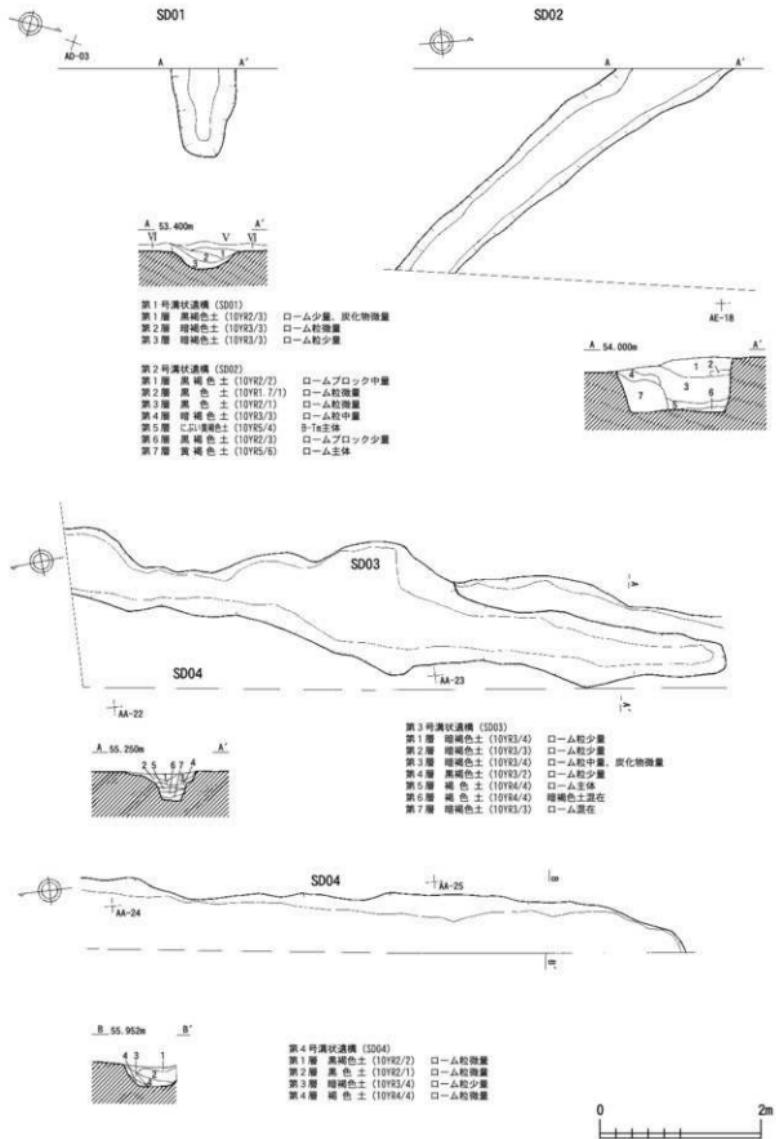
## 第2節 遺構外出土遺物

### 1. 繩文土器 (第18図19～25)

破片資料がほとんどで、摩滅の著しい資料もある。詳細は観察表 (第3表) に纏めたが、縄文時代前期の土器 (第18図19～21・23～25) と縄文時代晩期の土器 (第18図22) に大きく分類することができる。第18図19～21・23～25はすべて胎土に繊維の混入する土器であり、縄文時代前期末葉の円筒下層d<sub>1</sub>～d<sub>2</sub>式に帰属する資料である。第18図22は縄文時代晩期末葉の大洞C<sub>2</sub>式～A式期前後の資料であろう。

第18図19～21・23・24は円筒形の深鉢形土器の胸部資料と思われ、第18図25は口縁部資料である。比較的残りのよい第18図25は、口縁部にL R 縄文を横位・斜位・縦位に押捺し、胸部にはいわゆる木目状撚糸文と呼ばれる單軸絡条体第1 A類が縦位に回転施文される特徴的な土器である。第18図19～21・23・24もほぼ同様の所産時期が推定される。

第18図22は小型の深鉢形土器の底部資料と思われ、底部にはケズリ調整の痕跡が残り、胸部にはL R 斜縄文が施文される。



第16図 葛野（1）遺跡 SD

## 2. 土師器（第18図15）

土師器壺の口縁部資料が1点出土している。小型の土師器壺の口縁部～胴部片であり、内外面ともにヘラナデ調整である。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

## 3. 須恵器（第18図16・17・18）

須恵器壺の胴部資料が2点、須恵器壺の底部資料が1点出土している。第18図16・17は、ともに器面の色調が淡い赤褐色を呈し、焼成不良により土師質土器となったものであろう。外面には叩目痕が明瞭に残っており、比較的大型の須恵器壺の胴部片と思われる。第18図18は須恵器壺の底部片であり、底部にケズリ調整の痕跡が残っている。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

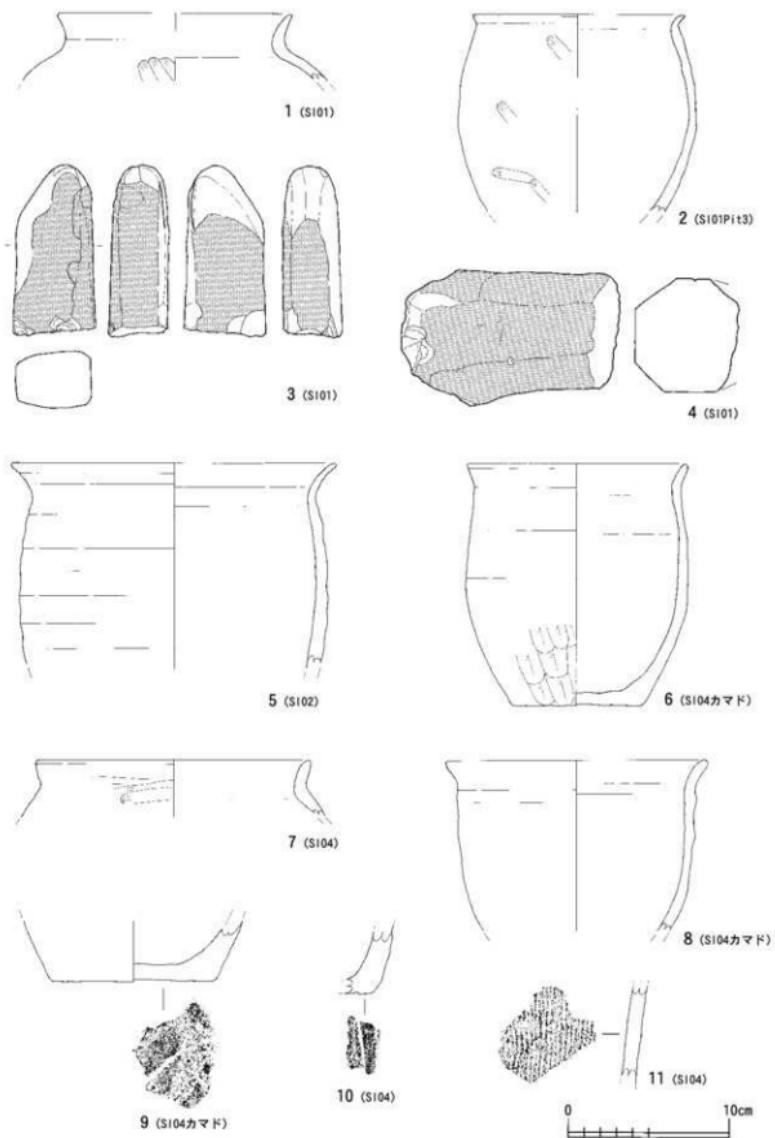
（野坂 知広）

第3表 葛野（1）遺跡出土遺物観察一覧

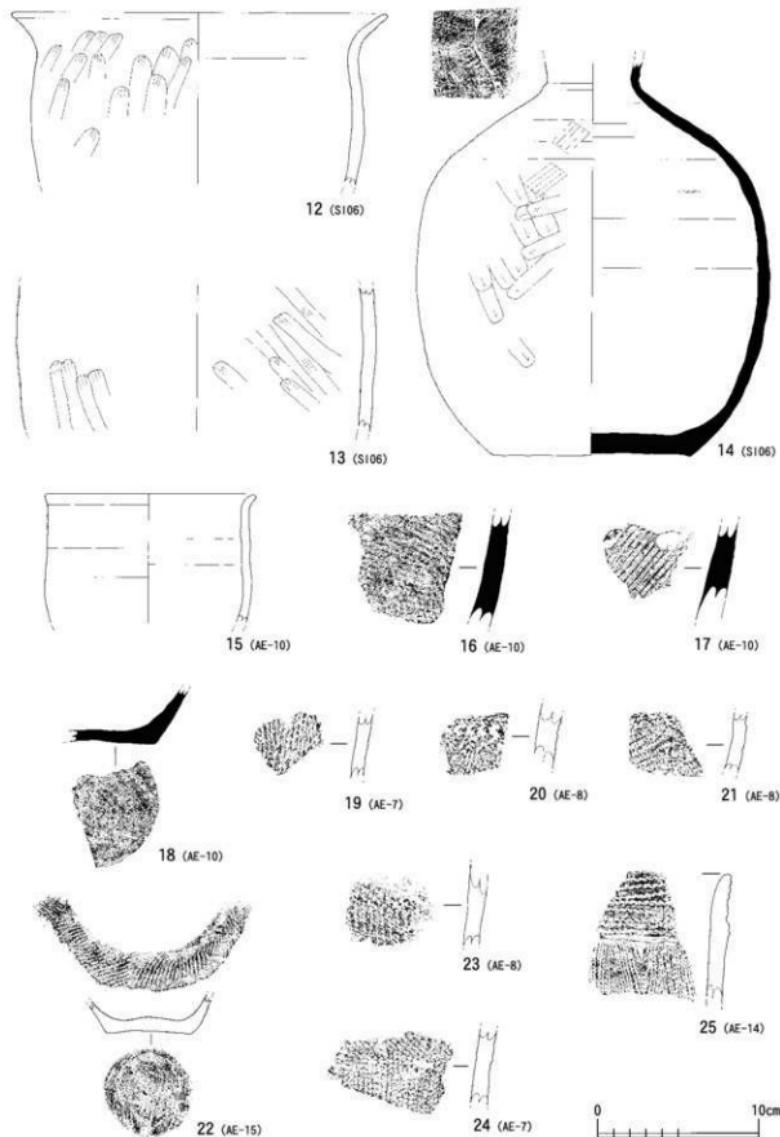
図版番号	器種	出土位置	計測値(cm)			外側調整	内側調整	底部調整	時期
			口径	底径	高さ				
第17図1	土師器壺	S 101	14.4	—	4.2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半
第17図2	土師器壺	S 101pit3	13.1	—	12.3	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半
第17図5	土師器壺	S 102	20.1	—	12.7	ロクロ	ロクロ	—	10世紀前半
第17図6	土師器壺	S 104カマド	13.5	7.9	15.0	ヘラナデ、 ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	10世紀初頭～前葉
第17図7	土師器壺	S 104	16.9	—	3.5	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第17図8	土師器壺	S 104カマド	16.1	—	10.6	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第17図9	土師器壺	S 104カマド	—	10.0	3.7	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	10世紀初頭～前葉
第17図10	製壺土器	S 104	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	桓目痕	10世紀初頭～前葉
第18図12	土師器壺	S 106	23.2	—	10.6	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第18図13	土師器壺	S 106	—	—	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第18図14	須恵器壺	S 106	—	12.2	24.4	叩目痕、 ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	10世紀初頭～前葉
第18図15	土師器壺	AE-10	12.9	—	8.0	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半
第18図16	須恵器壺	AE-10	—	—	—	叩目痕	ケズリ	—	10世紀前半
第18図17	須恵器壺	AE-10	—	—	—	叩目痕	ケズリ	—	10世紀前半
第18図18	須恵器壺	AE-10	—	—	3.3	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	10世紀前半

図版番号	種別	出土位置	計測値(cm)			石質	時期	備考	
			最大長	最大幅	最大厚			—	—
第17図3	砾石	S 101	10.4	4.8	3.5	凝灰岩	10世紀前半	擦痕四面	
第17図4	砾石	S 101	13.5	8.4	6.3	凝灰岩	10世紀前半	擦痕多面(推定八面)	

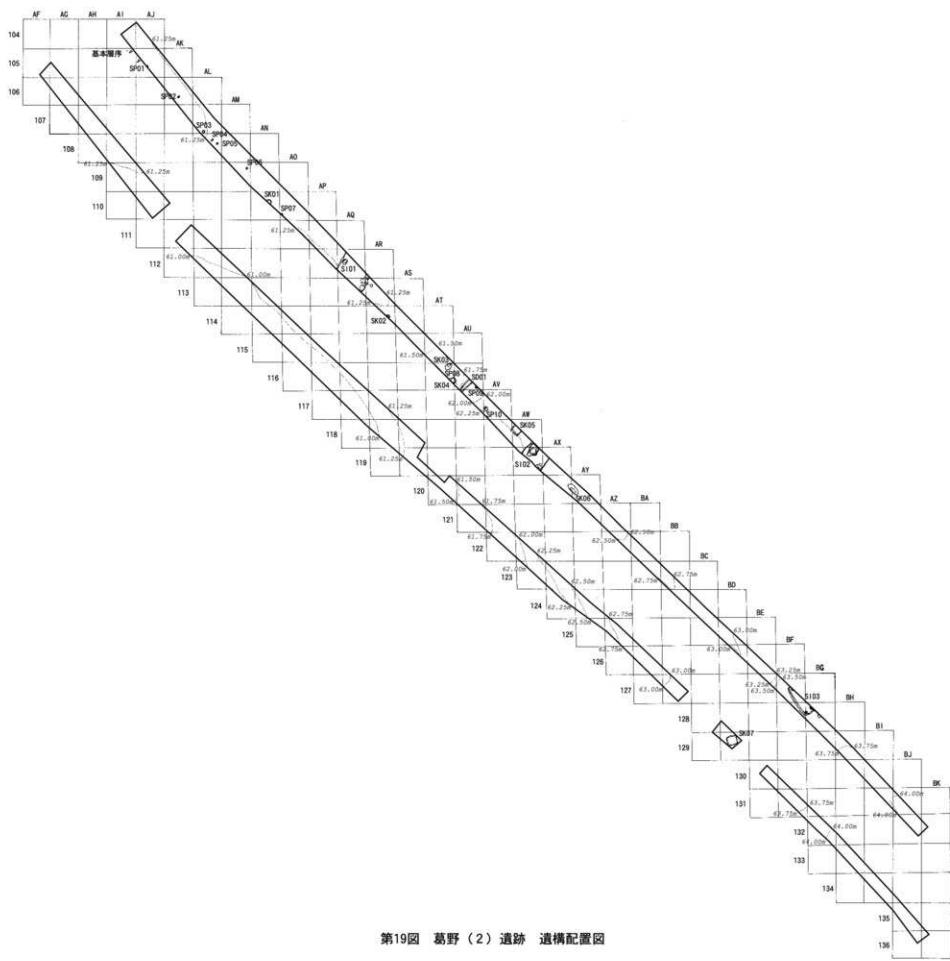
図版番号	器種	出土位置	部位	文様			時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
第17図11	繩文土器	S 104	胴部	R	単軸絡条体第1類(斜位)	—	前期末葉	繩維混入
第18図19	繩文土器	AE-7	胴部	単軸絡条体第1A類(縱位)	—	—	前期末葉	繩維混入
第18図20	繩文土器	AE-8	胴部	刺突(平具竹管状工具)、羽状繩文(結束第一種)	—	—	前期末葉	繩維混入
第18図21	繩文土器	AE-8	胴部	L	結節、R L繩文	—	前期末葉	繩維混入
第18図22	繩文土器	AE-15	底部	L R	繩文	—	晩明末葉	
第18図23	繩文土器	AE-8	胴部	L	単軸絡条体第1類(縱位)	—	前期末葉	繩維混入
第18図24	繩文土器	AE-7	胴部	羽状繩文(結束第一種)	—	—	前期末葉	繩維混入
第18図25	繩文土器	AE-14	口縁部	口縁部: L R押捺(横・斜・縱)	—	胴部: 単軸絡条体第1A類(縱位)	前期末葉	繩維混入



第17図 葛野（1）遺跡 SI出土遺物



第18図 葛野(1)遺跡 SI・遺構外出土遺物



第19図 葛野(2)遺跡 道構配置図

## 第IV章 葛野（2）遺跡

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 穫穴住居跡（S 1）

##### 第1号竪穴住居跡（第20図）

A Q・A R-112・113グリッドに位置する。平面形は方形を呈すものと思われ、住居の東西両側が調査区外に広がっている。規模は長軸455cm、短軸235cmを測り、深さは40cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は7層に分層したが、自然堆積と推定される。

床面よりピット3基が検出され、ピット1（Pit 1）は長軸46cm×短軸18cm×深さ10cm、ピット2（Pit 2）は長軸74cm×短軸62cm×深さ10cm、ピット3（Pit 3）は長軸65cm×短軸31cm×深さ55cmを測る。

カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（N-125°-E）にある。煙道は地下式で構築され、最大大191cm、最大幅96cmを測る。袖部には袖石が見られる。火床正面直上からは、楕円形の自然礫と被せるように逆位に置かれた土師器壺（第25図3）が検出され、転用支脚と思われる。土師器壺の内部に置かれた自然礫は、転用支脚が動かないように固定させるためのものであろう。また、カマドの南西隣にも焼土痕が確認され、その性格は判然としないが、カマド周辺に付属施設のあった可能性がある。

出土遺物は、土師器壺が2点（第25図1・2）と土師器壺が1点（第25図3）ある。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

##### 第2号竪穴住居跡（第21図）

A W・A X-118・119グリッドに位置する。平面形は方形を呈すものと思われ、住居の東西両側が調査区外に広がっている。規模は長軸360cm、短軸221cmを測り、深さは20cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は11層に分層したが、うち第1層～第4層・第6層は土坑2（SK 2）の覆土であり、第7層は土坑1（SK 1）の覆土である。第5層・第8層～第11層は自然堆積と思われる。

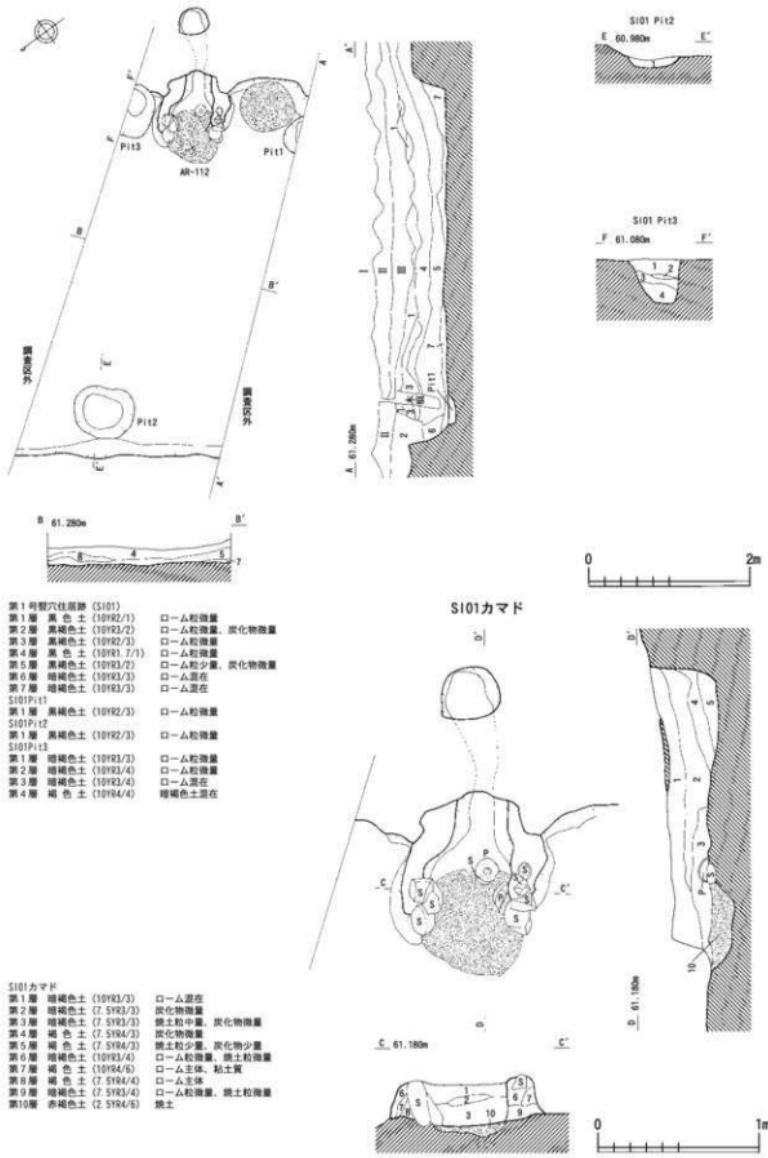
床面より土坑2基、ピット2基が検出され、土坑1（SK 1）は長軸176cm×短軸136cm×深さ43cm、土坑2（SK 2）は長軸122cm×短軸101cm×深さ36cm、ピット（Pit 1）は長軸25cm×短軸24cm×深さ10cm、ピット2（Pit 2）は長軸36cm×短軸14cm×深さ22cmを測る。土坑2は住居や土坑1の覆土を切るように掘られており、構築時期も新しいものと推定される。

カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（N-130°-E）にある。煙道部分は検出されず、おそらく半地下式で構築されたものが上部を削平されたのであろう。袖部周辺には袖石や粘土が見られる。

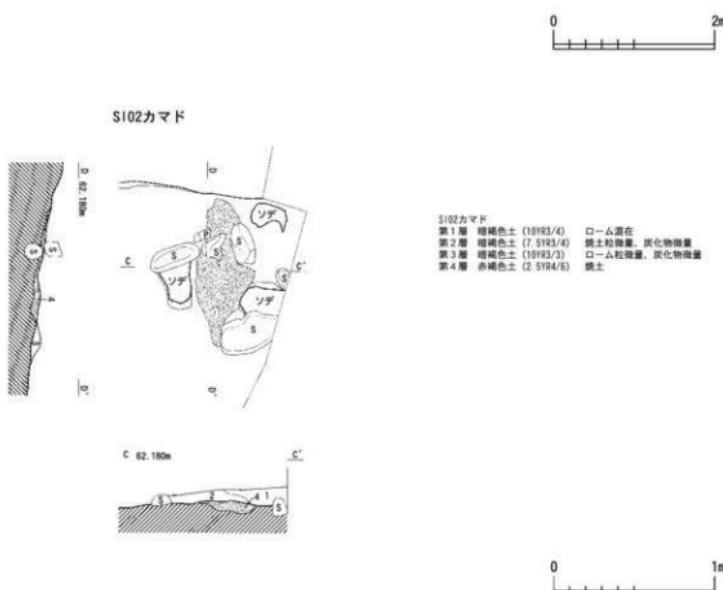
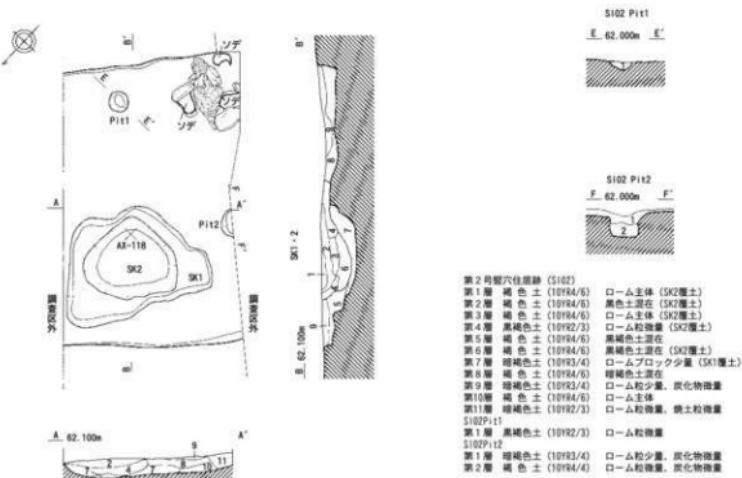
出土遺物は、土師器壺が4点（第25図4～7）あり、第25図4～6はカマド周辺からの出土である。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

##### 第3号竪穴住居跡（第22図）

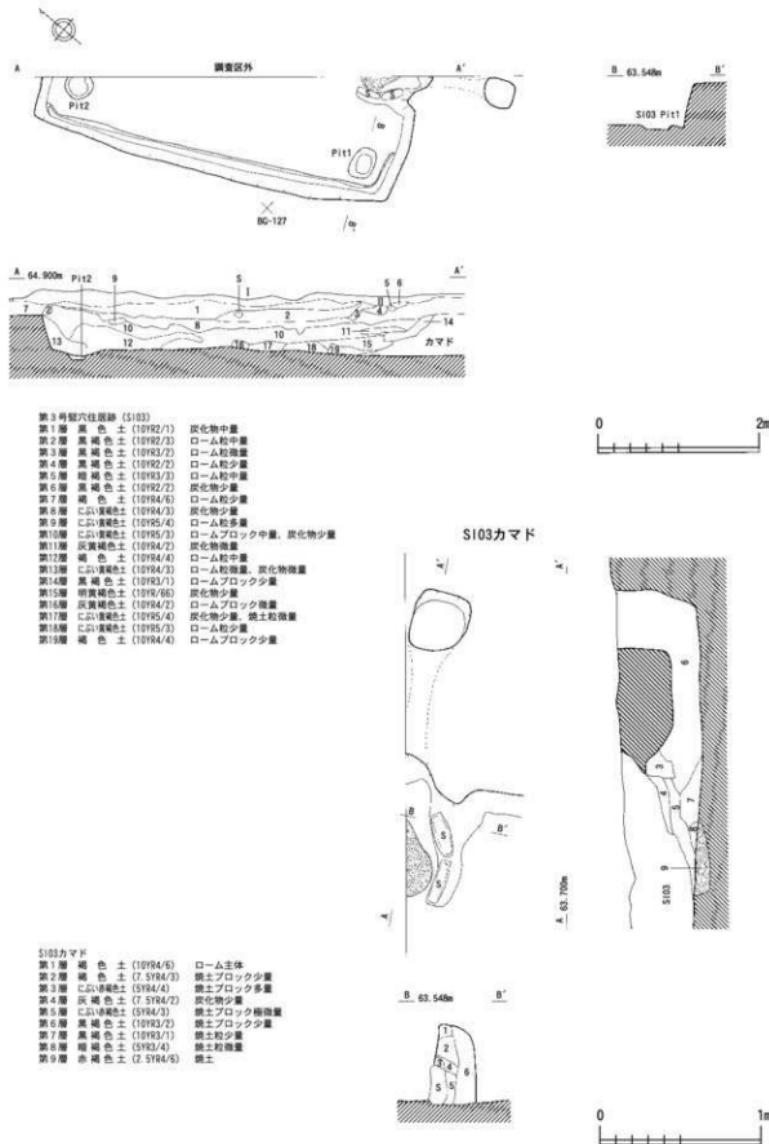
B F・B G-127・128グリッドに位置する。平面形は方形を呈すものと思われ、住居の東側が調査区外に広がっている。規模は長軸461cm、短軸155cmを測り、深さは50cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝が巡る。覆土は19層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。



第20図 葛野(2)遺跡 S101



第21図 葛野（2）遺跡 S102



第22図 葛野（2）遺跡 S103

床面よりピット2基が検出され、ピット1（Pit 1）は長軸39cm×短軸30cm×深さ8cm、ピット2（Pit 2）は長軸35cm×短軸27cm×深さ7cmを測る。住居主柱の一部と考えられる。

カマドは南壁で確認され、主軸は南方向（N-150°-E）にある。煙道は地下式で構築され、最大長190cm、最大幅46cmを測る。向かって右側袖部には袖石が2個検出され、火床面を囲むように構築されていることがよく分かる。火床面直上からは逆位に置かれた土師器壺底部（第26図16）が検出され、転用支脚として使用されたものであろう。

出土遺物は、土師器壺が4点（第26図9～12）、土師器甕が5点（第26図13～17）、須恵器壺が2点（第26図18・19）ある。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

## 2. 土坑（SK）

### 第1号土坑（第23図）

A N-110グリッドに位置する。平面形は不整梢円形を呈し、南西側が調査区外に広がっている。壁面は急角度に立ち上がり、規模は長軸84cm、短軸54cm、深さ17cmを測る。覆土は3層に分層したが、第3層は木根などの植物痕と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

### 第2号土坑（第23図）

A R-114グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、南西側が調査区外に広がっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、規模は長軸55cm、短軸36cm、深さ38cmを測る。覆土は3層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

### 第3号土坑（第23図）

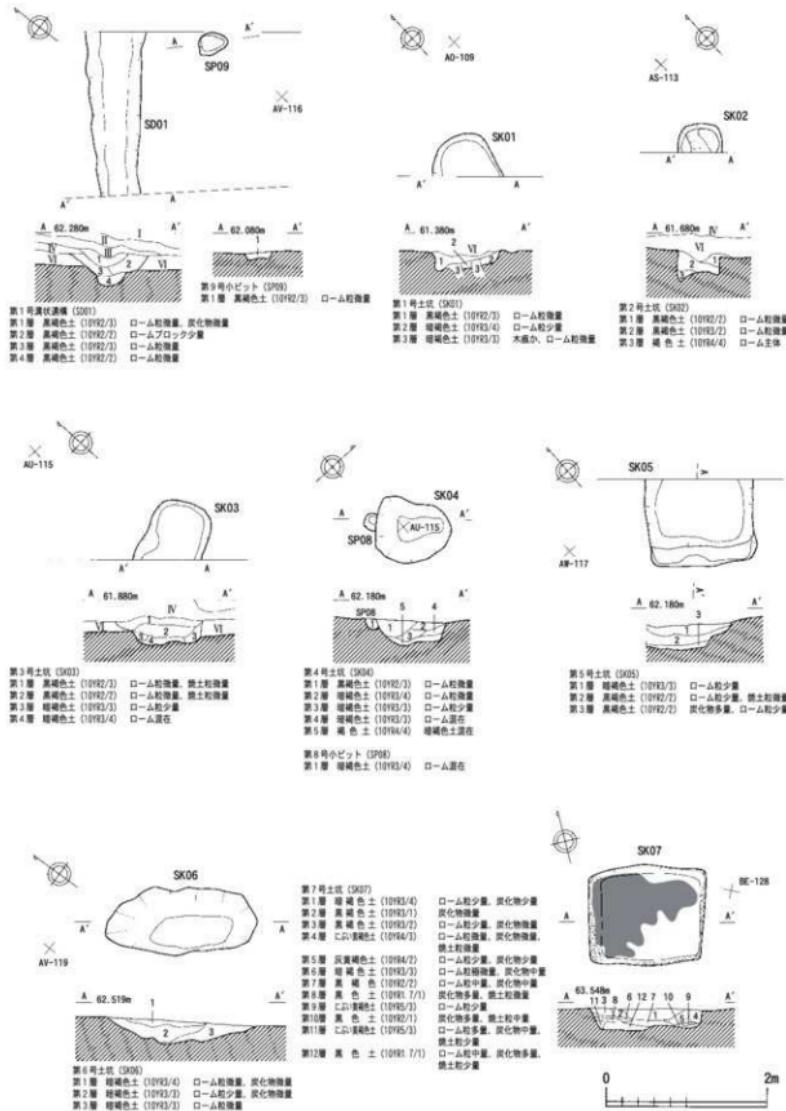
A T-116グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南西側が調査区外に広がっている。壁面は急角度に立ち上がり、規模は長軸80cm、短軸75cm、深さ30cmを測る。覆土は4層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、詳細は不明であるが、層序観察を参考にすると、平安時代と推定される。

### 第4号土坑（第23図）

A T・AU-116グリッドに位置する。第8号小ピット（S P08）を切っている。平面形は不整梢円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸93cm、短軸80cmを測り、深さは30cmである。覆土は5層に分層したが、自然堆積と推定される。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

### 第5号土坑（第23図）

AW-118グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、北東側が調査区外に広がっている。壁面はゆるやかに立ち上がり、断面形は二段構成になっている。規模は長軸134cm、短軸108cmを測り、深さは30cmである。覆土は3層に分層したが、第3層には炭化物が多量に堆積している。いわゆる焼成土坑である可能性がある。出土遺物がないため、詳細は不明であるが、おおむね平安時代と推定される。



第23図 葛野(2)遺跡 SK・SD

**第6号土坑（第23図）**

A X・A Y-120グリッドに位置する。平面形は不整長楕円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸186cm、短軸76cmを測り、深さは30cmである。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

**第7号土坑（第23図）**

B D-129グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸143cm、短軸124cmを測り、深さは27cmである。外壁には被熱痕（赤化焼土）が壁面上位に断続的に觀察され、床面近くの覆土中には炭化物が多量に混在している。いわゆる焼成土坑の可能性があろう。出土遺物は土師器壺（第25図8）があり、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定される。

**3. 小ピット（SP）**

本遺跡からは柱穴状の小ピットが10基検出された（第24図）。出土遺物はなく、その所産時期は不明である。配列の明確なものも確認できなかった。計測値等は觀察表に纏めた（第4表）。

**第4表 葛野（2）遺跡小ピット觀察一覧**

遺構番号	図版番号	位置（グリッド）	平面形	規模（cm）			備考
				長軸	短軸	深さ	
S P01	第24図	A J-105	楕円形	29	16	21	
S P02	第24図	A K-106	楕円形	28	20	23	
S P03	第24図	A L-107	不整円形	40	38	30	
S P04	第24図	A L-108	長楕円形	34	26	20	
S P05	第24図	A L-108	不整楕円形	31	25	16	
S P06	第24図	A N-109	不整形	25	25	12	
S P07	第24図	A O-110	不整長楕円形	34	16	18	
S P08	第24図	A U-116	不整形	20	14	12	S K04と重複
S P09	第24図	A U-116	不整形	37	27	9	
S P10	第24図	A V-117	不整楕円形	60	45	14	

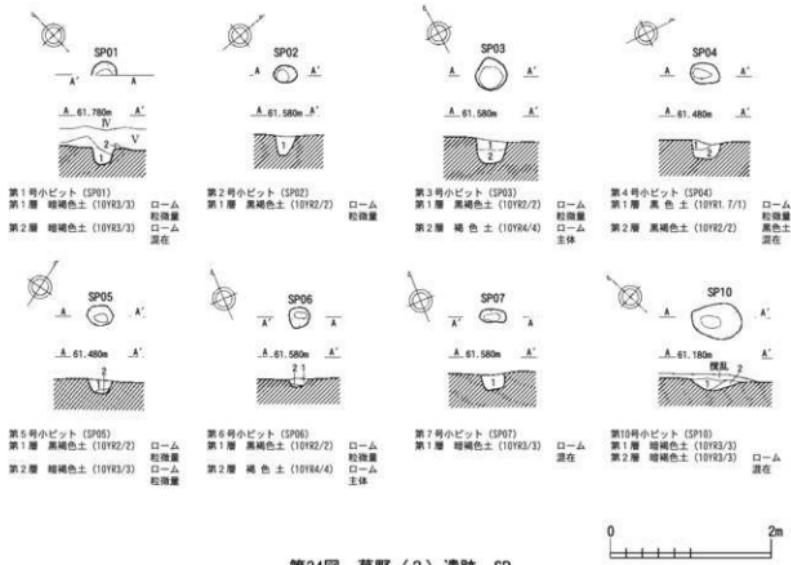
**4. 溝状遺構（SD）****第1号溝状遺構（第23図）**

A U-116グリッドに位置する。平面形は細長い直線状を呈し、東西両側が調査区外に延びている。規模は最大長2.1m、最大幅0.7mを測り、深さは0.35mである。壁面はゆるやかに立ち上がり、長軸方向は北東方向（N-50°-E）にある。覆土は4層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。出土遺物はないが、層序觀察を参考にすると、竪穴住居跡と同じ所産時期が推定されよう。

**第2節 遺構外出土遺物****1. 須恵器（第26図20）**

A P-112グリッドより須恵器壺の口縁部資料が1点出土している。小型の長頸壺の口縁部であり、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定される。

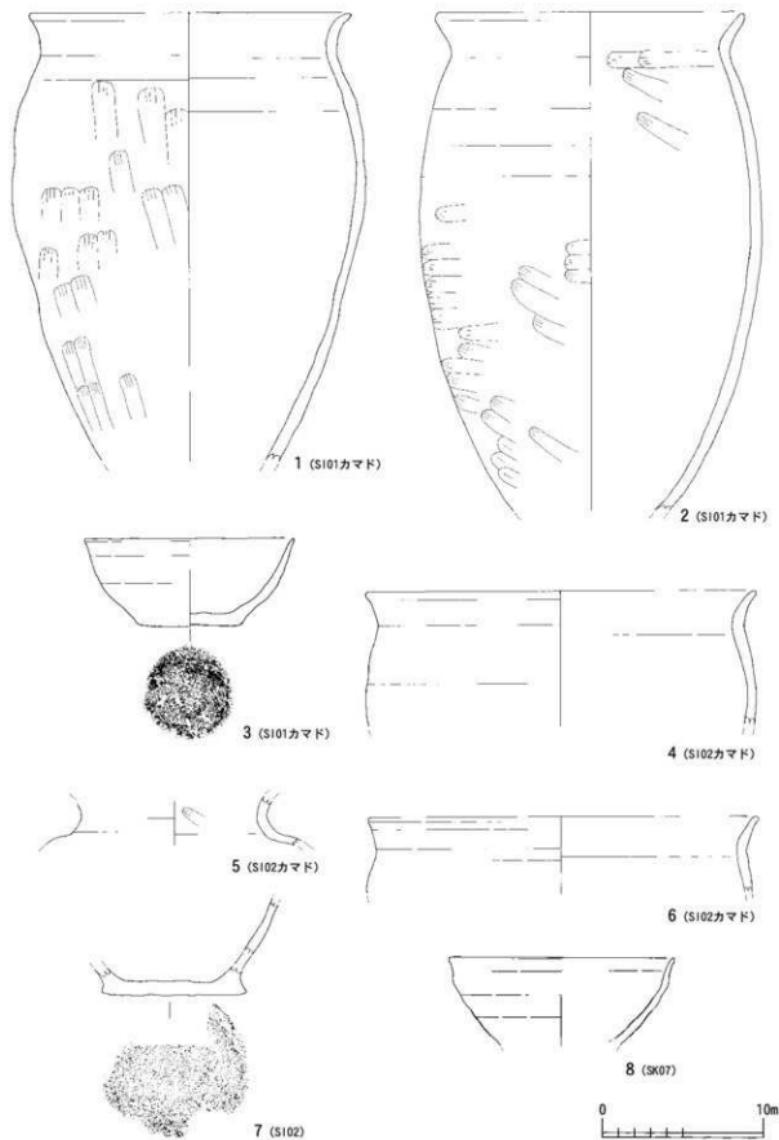
(野坂 知広)



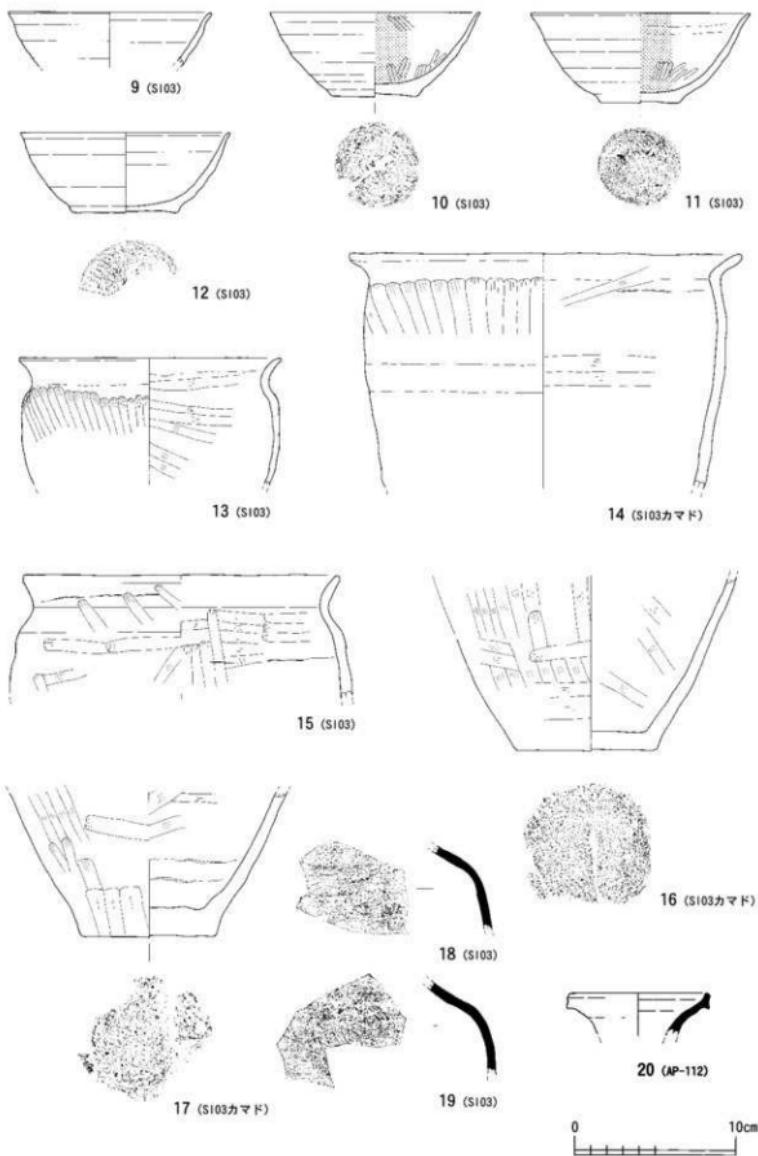
第24図 葛野 (2) 遺跡 SP

第5表 葛野 (2) 遺跡出土遺物観察一覧

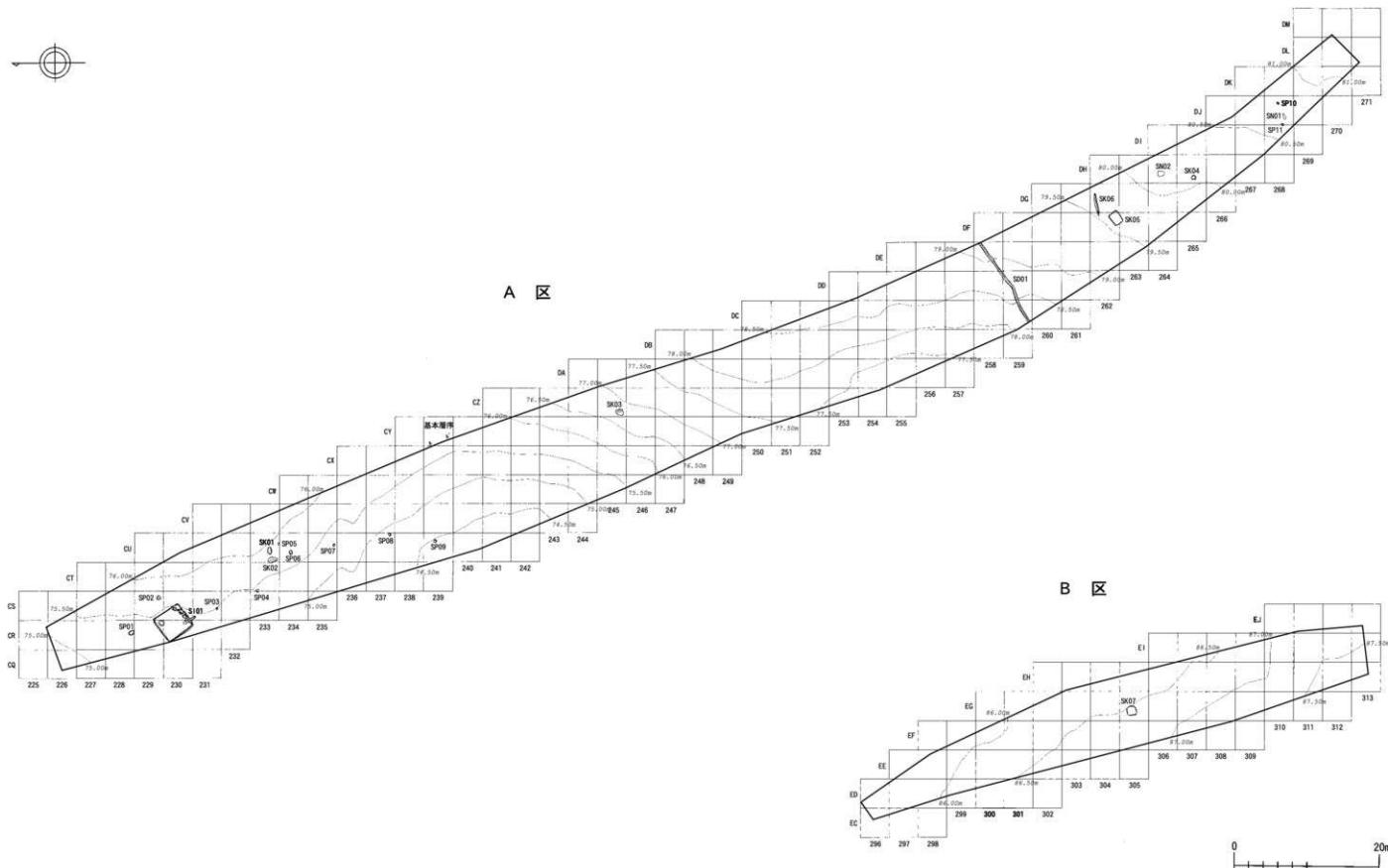
国版番号	器種	出土位置	計測値 (cm)			外側調整	内側調整	底部調整	時 期	備 考
			口径	底径	高さ					
第25図1	土師器壺	S 101カマF	19.8	—	27.9	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第25図2	土師器壺	S 101カマF	18.9	—	31.0	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第25図3	土師器壺	S 101カマF	12.9	6.2	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	転用支脚
第25図4	土師器壺	S 102カマF	24.0	—	8.3	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第25図5	土師器壺	S 102カマF	—	—	2.7	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第25図6	土師器壺	S 102カマF	24.0	—	4.9	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第25図7	土師器壺	S 102	—	8.9	6.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	砂底	10世紀前半	
第25図8	土師器壺	S K07	13.9	—	5.5	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図9	土師器壺	S 103	12.5	—	3.3	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図10	土師器壺	S 103	13.1	5.3	5.2	ロクロ	ヘラミガキ(黒色)	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第26図11	土師器壺	S 103	13.5	4.9	5.6	ロクロ	ヘラミガキ(黒色)	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第26図12	土師器壺	S 103	13.5	4.9	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第26図13	土師器壺	S 103	16.2	—	7.2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図14	土師器壺	S 103カマF	24.2	—	14.6	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図15	土師器壺	S 103	19.5	—	7.7	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図16	土師器壺	S 103カマF	—	8.5	11.0	ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	10世紀初頭～前葉	転用支脚
第26図17	土師器壺	S 103カマF	—	8.2	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	10世紀初頭～前葉	
第26図18	須恵器壺	S 103	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図19	須恵器壺	S 103	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図20	須恵器壺	A P-112	8.4	—	2.7	ロクロ	ロクロ	—	10世紀前半	



第25図 葛野（2）遺跡 出土遺物（1）



第26図 葛野（2）遺跡 出土遺物（2）



第27図 葛野(3)遺跡 遺構配置図

## 第V章 葛野（3）遺跡

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 穫穴住居跡（S I）

##### 第1号竪穴住居跡（第29図）

C R・C S-229・230グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、規模は長軸432cm、短軸389cm、深さ40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝が断続的に全周する。

床面よりピット7基が検出され、ピット1（Pit 1）は長軸30cm×短軸25cm×深さ10cm、ピット2（Pit 2）は長軸57cm×短軸26cm×深さ9cm、ピット3（Pit 3）は長軸85cm×短軸71cm×深さ11cm、ピット4（Pit 4）は長軸60cm×短軸50cm×深さ12cm、ピット5（Pit 5）は長軸22cm×短軸18cm×深さ12cm、ピット6（Pit 6）は長軸15cm×短軸12cm×深さ10cm、ピット7（Pit 7）は長軸49cm×短軸17cm×深さ7cmを測る。判然としないが、ピット5～7は住居入口に関わる遺構の可能性があろう。覆土は11層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。

カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（N-142°-E）にある。煙道は半地下式で構築され、最大長195cm、最大幅80cmを測る。袖部には袖石が見られる。より煙道に近い火床正面直上からは、逆位に置かれた土師器甕底部が2点（第30図5・7）並んで検出され、転用支脚と思われる。土師器甕などが二つ据えられていた姿を想定することができる（写真11参照）。

出土遺物は、土師器甕が9点（第30図4～12）、土製支脚が1点（第30図3）、土玉が2点（第28図1・2）、縄文土器が3点（第30図1・2・13）ある。土玉2点は住居床面の北西隅から集中して検出された。また、図示できなかったが鉄滓（鍛治滓）の小片が数点出土している。第30図1・13は縄文後期初頭の弥栄平（2）式（成田1989）・蟹沢1期（葛西2002）に、第30図2は縄文後期前葉の十腰内I式に類する土器と推定される。本住居跡の所産時期は、おおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

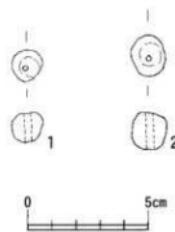
#### 2. 土坑（S K）

##### 第1号土坑（第31図）

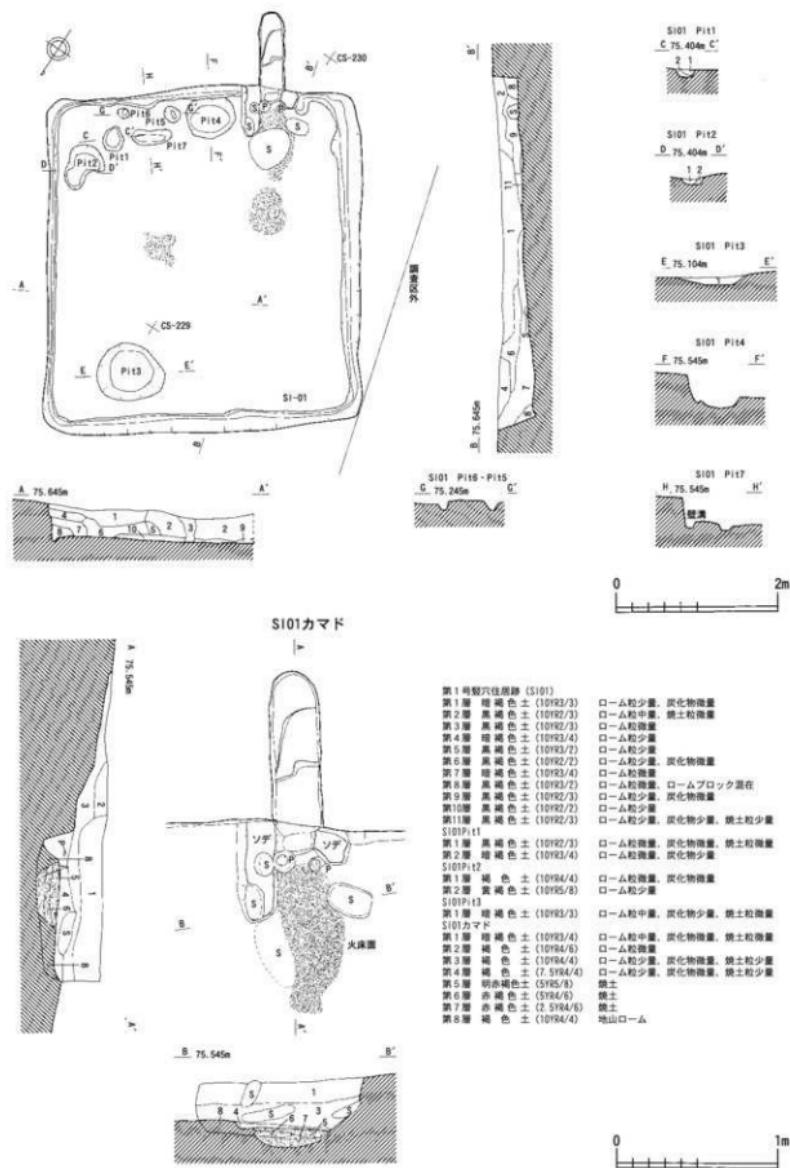
C U-233グリッドに位置する。平面形は不整梢円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸107cm、短軸56cmを測り、深さは13cmである。覆土は1層としたが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

##### 第2号土坑（第31図）

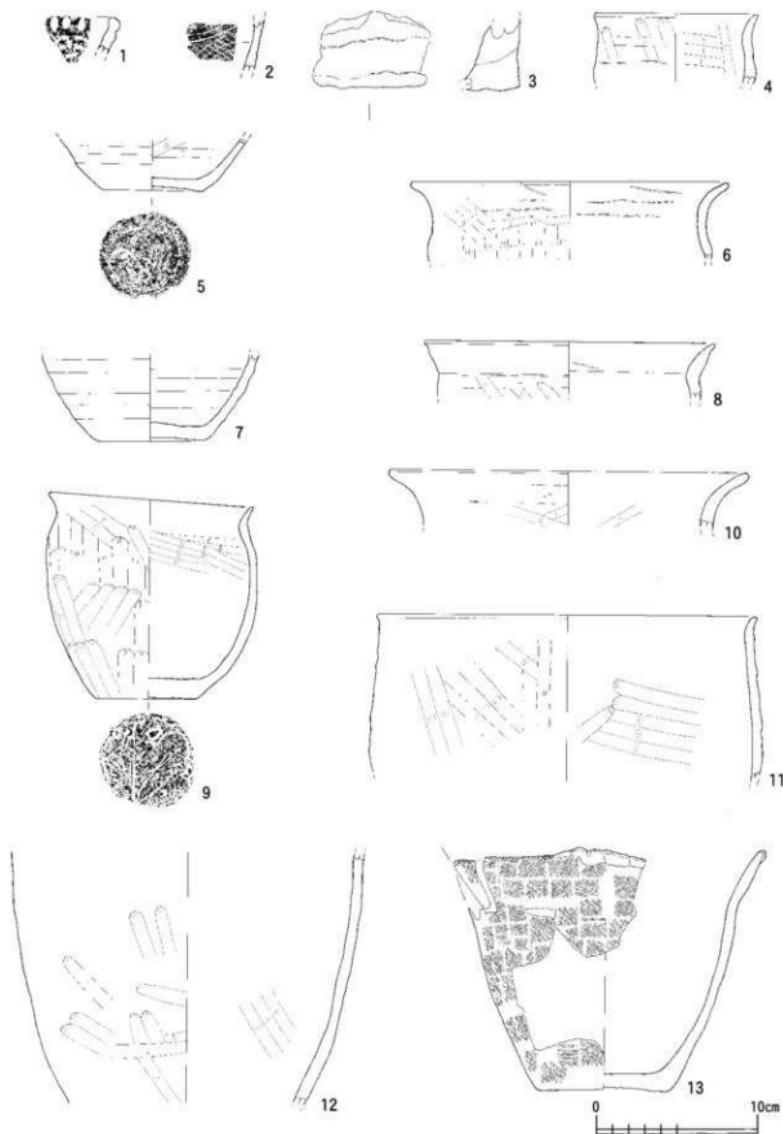
C U-233グリッドに位置する。平面形は不整梢円形を呈し、壁面は急角度に立ち上がる。規模は長軸135cm、短軸74cmを測り、深さは33cmである。覆土は5層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。



第28図 葛野（3）遺跡  
SI01出土土玉



第29図 葛野(3) 遺跡 S101



第30図 葛野（3）遺跡 SI01出土遺物

**第3号土坑（第31図）**

C Z-245グリッドに位置する。平面形は不整方形を呈し、壁面は急角度に立ち上がる。規模は長軸80cm、短軸66cmを測り、深さは39cmである。覆土は3層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。確認面の段階で焼土と炭化物を検出しており、覆土下位にまで大きな炭化物が混入していた（写真12参照）。出土遺物がないため判然とはしないが、古代の製炭土坑に類する遺構と推定されよう。

**第4号土坑（第31図）**

D H-265グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、壁面はやや急角度に立ち上がる。規模は長軸70cm、短軸60cmを測り、深さは4cmである。覆土は1層としたが、確認面には炭化物が検出された。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

**第5号土坑（第31図）**

D F・D G-262・263グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸177cm、短軸141cmを測り、深さは57cmである。床面直上にはB-Tm火山灰が部分的に、炭化物が薄く一面に堆積していた。外壁には被熱痕（赤化焼土）が明瞭に観察され、壁面下位には全周している。床面も一面焼土に覆われているが、著しい硬化面は確認されなかつた。いわゆる焼成土坑であるが、古代の製炭土坑あるいは土師器焼成土坑の可能性が考えられよう。木立雅朗氏の記述（窯跡研究会1997）に従えば、より土師器焼成土坑（焼成坑）に近いとも思われるが、これを焼成坑とすると前壁・奥壁の区別が判然としない。形態的には、望月精司氏の分類するA類焼成坑II類b類2類（窯跡研究会1997）に近似する土坑である。

**第6号土坑（第31図）**

D G-262グリッドに位置する。平面形は細長い長楕円形（溝状）を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は最大長304cm、最大幅30cmを測り、深さは103cmである。幅に対して極めて深い構造となっており、主軸は南東方向（N-74°-E）にある。

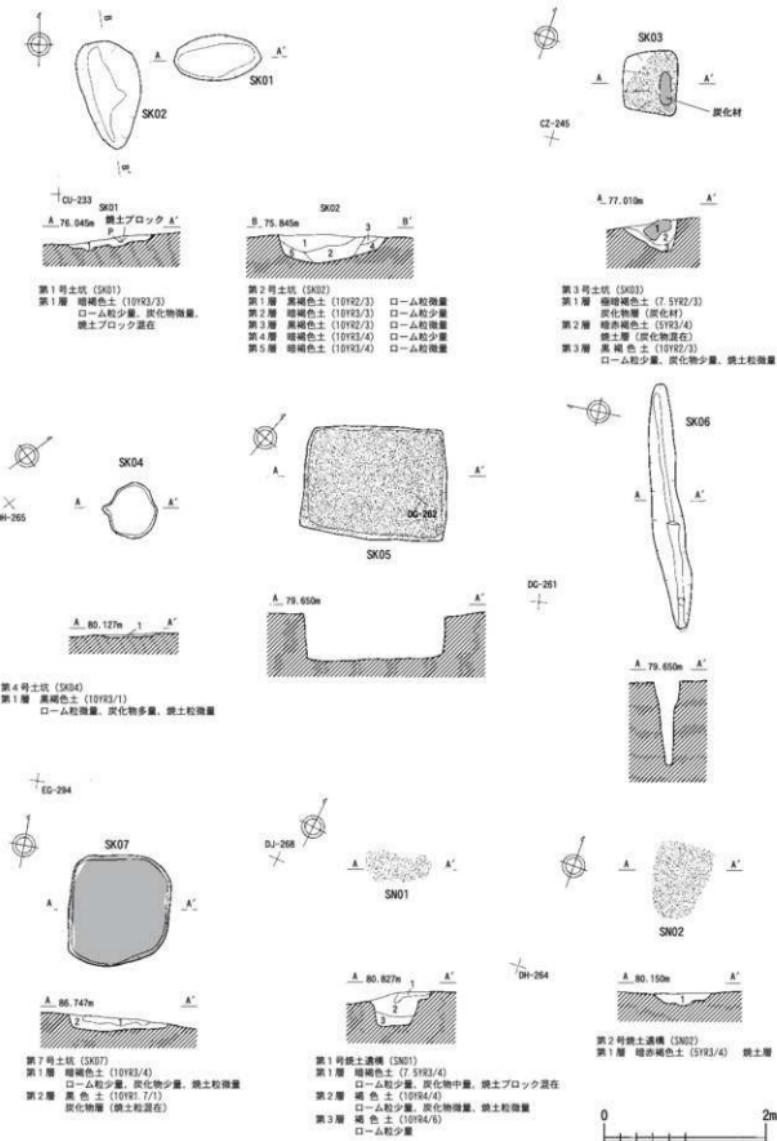
本県では典型的な陷穴土坑（T-pit）と思われるが、実際に狩猟用の陷穴として使用されたかどうかは詳らかでない。出土遺物はないが、形態的特徴から縄文前期～後期の所産時期が推定される。

**第7号土坑（第31図）**

E G-305グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸137cm、短軸125cmを測り、深さは19cmである。覆土は2層に分層したが、自然堆積と思われる。確認面の段階で炭化物と土坑外壁の被熱痕（赤化焼土）が観察され、炭化物は覆土全体に及んでいた。外壁の被熱痕は、壁面上位に小さく偏在するのみであった。いわゆる焼成土坑であるが、古代の製炭土坑に類する遺構と推定されよう。

**3. 焼土遺構（SN）**

ここで言う焼土遺構とは、土坑などの下部構造を伴わず、確認面において焼土（焼成痕）のみが残存する遺構である。その性格は不明であるが、該期の集落遺跡などによく散見できる遺構であろう。本調



第31図 葛野（3）遺跡 SK・SN

査においては2基検出された。

#### 第1号焼土遺構（第31図）

D J - 268グリッドに位置する。平面形は不整長円形で、長軸80cm、短軸30cm、深さ（焼土堆積）21cmを測る。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

#### 第2号焼土遺構（第31図）

D H - 264グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長軸94cm、短軸70cm、深さ（焼土堆積）15cmを測る。遺構に伴うとは言えないが、近接した場所より土師器壺（第34図25）が出土している。

#### 4. 小ピット（S P）

本遺跡からは小ピットが11基検出された（第32図）。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。配列の明確なものも確認できなかった。計測値等は観察表に纏めた（第6表）。

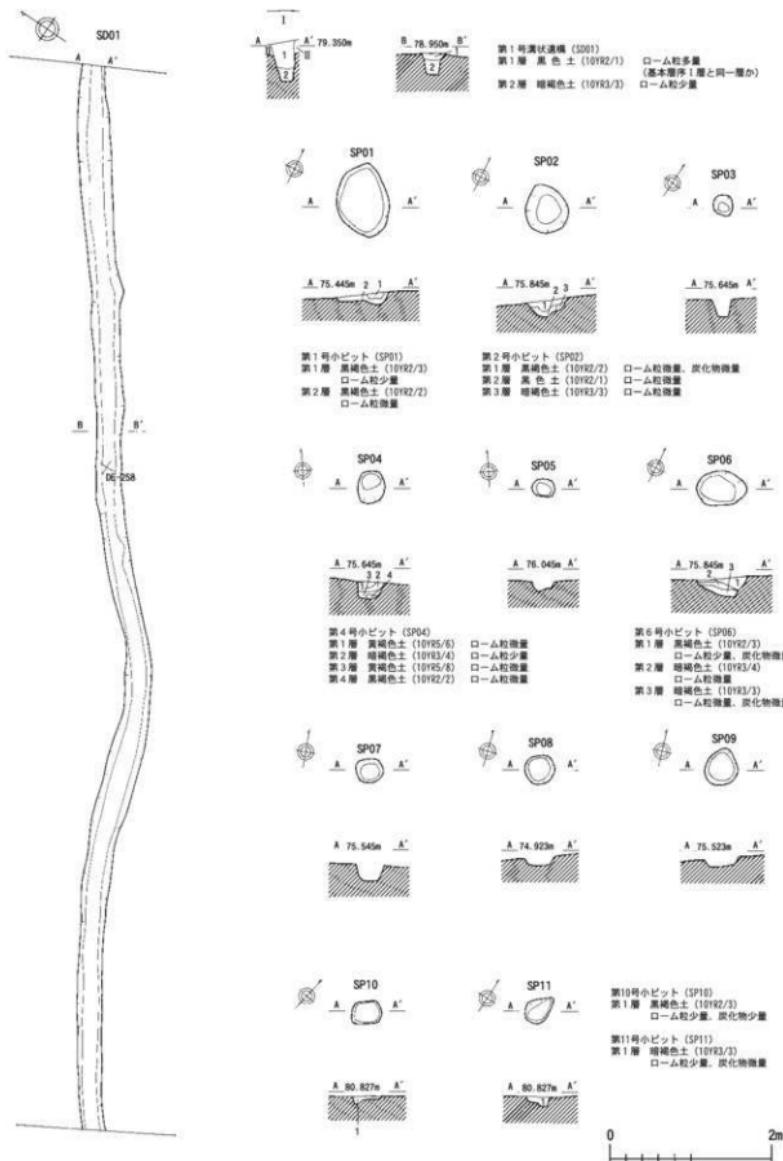
第6表 葛野（3）遺跡小ピット観察一覧

遺構番号	図版番号	位置（グリッド）	平面形	規模（cm）		
				長軸	短軸	深さ
S P 01	第32図	C R - 228	不整楕円形	92	64	14
S P 02	第32図	C S - 229	不整円形	62	53	20
S P 03	第32図	C S - 231	不整円形	25	25	22
S P 04	第32図	C T - 233	不整楕円形	41	34	22
S P 05	第32図	C U - 233	不整楕円形	28	22	15
S P 06	第32図	C U - 234	不整楕円形	62	43	23
S P 07	第32図	C U - 235	不整円形	34	30	19
S P 08	第32図	C U - 237	不整円形	36	35	8
S P 09	第32図	C U - 239	不整楕円形	46	41	9
S P 10	第32図	D J - 268	圓丸方形	37	28	10
S P 11	第32図	D J - 268	不整形	31	30	13

#### 5. 溝状遺構（S D）

##### 第1号溝状遺構（第32図）

D C - DD - 259、DD - D E - 258グリッドに位置する。平面形はゆるやかに蛇行するが、ほぼ直線状を呈し、東西両側の調査区外にも延びている。規模は最大長13.16m、最大幅0.25m、深さ0.35mを測るが、東壁層序を参考にすると本来の深さは0.50m程度であった可能性があろう。壁面は急角度に立ち上がり、長軸方向は東西（N - 56° - E）にある。覆土は2層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。基本層序II層上面より掘り込まれているように見えるが、出土遺物がないため所産時期は特定できない。



第32図 葛野（3）遺跡 SP・SD

## 第2節 遺構外出土遺物

### 1. 繩文土器

すべて破片資料であり、風化によって摩滅の著しいものもある（第34図2～24）。詳細は観察表（第7表）に纏めたが、縄文前期の土器（第34図2～8・10～22）と縄文中・後期の土器（第34図9・23・24）に大きく分類することができる。破片が小さいため明確なことは言えないが、第34図2・3・5・6・10～13・15・16・18・22は胎土に繊維を含み、縄文前期末葉の円筒下層d<sub>1</sub>～d<sub>2</sub>式に帰属する資料と思われる。胎土に繊維を含まない第34図4・7・8・14・17・19～21の土器も、おおむね該期に比定できよう。第34図9・23・24は縄文中期末葉～後期初頭の土器と推定される。

### 2. 縄文石器

#### 磨製石斧（第34図26）

変形安山岩製の磨製石斧が1点出土している。表面は丁寧に研磨・整形され、基部が角張り、平坦面を形成する。基部から刃部に向かって幅広になる典型的な定角式磨製石斧であろう。形態的特徴などから、おおむね縄文後期の所産時期が推定される。

#### 叩石（第34図27）

凝灰岩製の叩石が1点出土している。ちょうど手のひらで握れる程度の大きさ・形状の自然礫が選択されていることが分かる。二面に亘って敲打痕（凹部）が観察され、植物食関連の石器と推定される。所産時期は判然としないが、縄文後期の資料であろう。

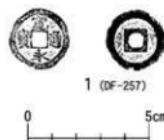
### 3. 須恵器

須恵器甕の胴部破片が1点出土している（第34図1）。外面には縄を巻いた叩き板の叩目痕が観察されるが、内面は器面剥離もあり判然としない。所産時期は、おおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

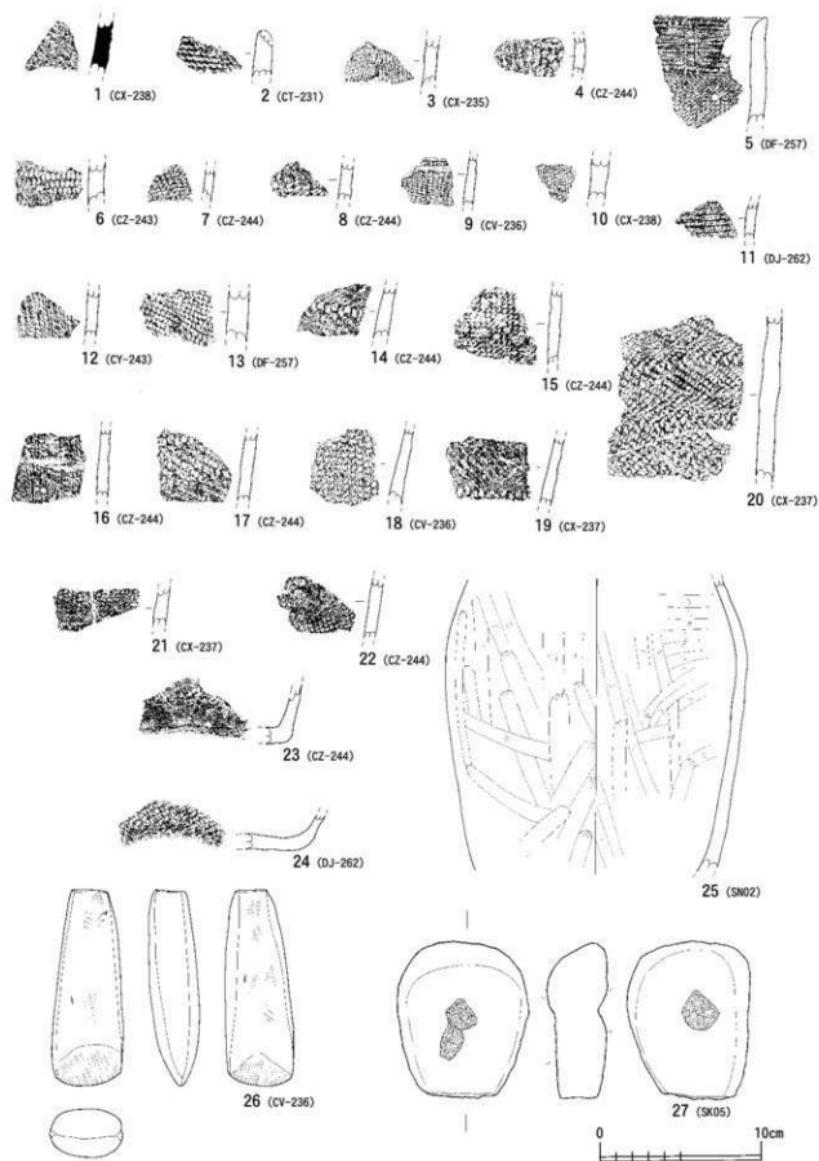
### 4. 銭貨

円形方孔の銅錢が1点出土している（第33図1）。小型（最大径2.4cm）で背面無文の寛永通宝であり、内郭・外郭ともに幅広に作られている。寛永～万延年間（江戸時代）に鋳造された一文銭であろう。

（野坂 知広）



第33図 葛野（3）遺跡  
遺構外出土銭貨



第34図 葛野（3）遺跡 SK・SN・遺構外出土遺物

第7表 葛野（3）遺跡出土遺物観察一覧

回収番号	器種	出土位置	出土寸法	計測値(cm)	口径 底径	深さ(cm)	外面部形状	内面調整	底面調節	時 期	備考
33-30104-3	土師文調	H.L.底盤	S.1.01	—	—	—	ヘラコ調整	—	砂底?	10世紀前半	
33-30104-4	土師器皿	S.1.01	10.1	—	—	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-5	土師器皿	S.1.01	—	—	5.9	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-6	土師器皿	S.1.01	19.7	—	—	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-7	土師器皿	S.1.01	6.6	—	—	—	ヘラコ	ヘラコ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-8	土師器皿	S.1.01	17.9	—	—	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-9	土師器皿	S.1.01	12.5	5.9	12.5	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-10	土師器皿	S.1.01	22.1	—	—	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-11	土師器皿	S.1.01	23.4	—	—	—	ヘラナダ	ヘラナダ	直角系切(45°)	10世紀前半	鉢用支脚
33-30104-12	土師器皿	C.X.-258	—	—	—	—	明日原	明日原	—	10世紀前半	
33-34104-25	土師器皿	S.N02	—	—	—	—	ヘラナダ	ヘラナダ	—	10世紀前半	
回収番号	種別	出土位置	出土人尺	計測値(cm)	底人尺	最大厚	時 期	備考	備考	時 期	備考
第28回1	十五	S.1.01	1.3	1.2	1.2	1.2	10世紀前半	穿孔あり (160, 2cm)	穿孔あり (160, 2cm)	後期	
第28回2	十五	S.1.01	1.7	1.4	1.5	1.5	10世紀前半	穿孔あり (160, 2cm)	穿孔あり (160, 2cm)	後期	
16世紀番号	器種	出土位置	S.1.01	—	—	—	文	横	後期	後期	
第30回1	織文土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
第30回2	織文土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-13	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-2	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-3	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-4	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-5	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-6	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-7	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-8	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-9	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-10	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-11	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-12	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-13	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-14	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-15	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-16	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-17	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-18	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-19	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-20	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-21	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-22	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-23	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
33-34104-24	土器	S.1.01	—	—	—	—	—	—	—	後期	
回収番号	種別	出土位置	出土人尺	計測値(cm)	底人尺	最大厚	石 質	時 期	備考	時 期	備考
第34回26	磨製石斧	C.V.-236	12.2	—	—	—	安第安玄武岩	圓文地	後期	後期	
33-34104-25	印	S.K.05	9.6	8.5	3.0	3.7	麻灰岩	圓文地	後期	後期	
回収番号	種別	出土位置	出土人尺	計測値(cm)	底人尺	厚	石 質	時 期	IL-L時代	一文鏡、背面無文	備考
第33回1	笠木頭	D.F.-257	2.4	0.6	0.1	—	解縫	—	—	—	

## ま と め

葛野遺跡群は、青森市大字大別内字葛野地内に所在する葛野（1）遺跡・葛野（2）遺跡・葛野（3）遺跡の3遺跡を便宜上総括した呼称であり、今回、市道金浜小畑沢線道路改良工事に伴い、平成18年度・19年度の二カ年に亘って発掘調査を実施した。工事予定地を対象に、平成18年度は葛野（1）遺跡（589m<sup>2</sup>）・葛野（2）遺跡（711m<sup>2</sup>）を、平成19年度は葛野（3）遺跡（2,887m<sup>2</sup>）を調査し、葛野（1）遺跡では平安時代の竪穴住居跡6軒、時期不明の土坑1基・小ビット14基、平安時代の溝状遺構4条、葛野（2）遺跡では平安時代の竪穴住居跡3軒・土坑3基、時期不明の土坑4基・小ビット10基、平安時代の溝状遺構1条、葛野（3）遺跡では平安時代の竪穴住居跡1軒・土坑3基、縄文時代の土坑1基、時期不明の土坑3基・焼土遺構2基・小ビット11基・溝状遺構1条が検出された。

特に、葛野（1）遺跡・葛野（2）遺跡は、現在の道路両脇にあたる細長い調査区であったが、竪穴住居跡が密集しており、集落跡の中心部であった可能性がある。対して、葛野（3）遺跡は、比較的広い区域を調査したにもかかわらず、竪穴住居跡は調査区北側より1軒確認されたのみであった。過去の調査区（平成8年度・10年度）における発掘調査成果などからも、葛野遺跡群にまたがって占地する古代集落は、現在の市道金浜小畑沢線と県営高田地区農免農道が交わる十字路北側（山林・耕作地）を中心域を持つものと推定される。その範囲は、舌状台地（微高地）の地形に沿った南北に長い形状を呈すると思われ、標高50~70m内外の緩斜面上に限定されるのであろう。

本調査において検出された竪穴住居跡は、方形の平面形を呈し、ほぼ例外なく南東壁にカマドを持つ青森市域通有の事例であり、カマドを設置した南東壁に住居入口が開けられていたと思われる。カマド火床面には土師器壺あるいは土師器甕底部を利用した転用支脚が据えられることが多く、葛野（2）遺跡第1号竪穴住居跡には土師器壺が1点、第3号竪穴住居跡には土師器甕底部が1点逆位に置かれ、葛野（3）遺跡第1号竪穴住居跡には土師器甕底部が逆位に2点並んで置かれていた。カマドに土器を1点据えるタイプと2点据えるタイプの2種類があったことが窺われる。

また、葛野遺跡群に特徴的な遺構として長方形の焼成土坑が挙げられる。葛野（2）遺跡における第5号・第7号土坑、葛野（3）遺跡における第5号・第7号土坑が相当するが、本来の深さは葛野（3）遺跡第5号土坑に見られるように50cm以上あったと推定される。その用途・機能は、土師器焼成土坑に類する可能性もあるが、焼成痕を示す土師器破片等は検出されておらず、現状では製炭土坑と理解するのが妥当であろう。

本遺跡群における古代集落の造営時期は、出土土器・降下火山灰（B-Tm）の堆積状況などから、平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定できるものと思われる。

（担当者一同）

## 引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1983 『小館遺跡』
- 青森県教育委員会 1998 『新町野・野木遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1999 『野木遺跡II』
- 青森県教育委員会 2000 a 『新町野遺跡II』
- 青森県教育委員会 2000 b 『野木遺跡III』
- 青森市教育委員会 1987 『横内城跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1998 a 『新町野遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1998 b 『野木遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1999 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書II』
- 青森市教育委員会 2001 『新町野遺跡発掘調査報告書II・野木遺跡発掘調査報告書II』
- 青森市教育委員会 2006 a 『小牧野遺跡発掘調査報告書IX』
- 青森市教育委員会 2006 b 『新町野遺跡発掘調査報告書III』
- 青森市教育委員会 2006 c 『市内遺跡発掘調査報告書14』
- 青森市教育委員会 2007 a 『月見野(1)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 2007 b 『合子沢松森(2)遺跡発掘調査報告書』
- 五所川原市教育委員会 1998 『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』
- 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器窯跡群』
- 小友 叔雄 1956 『荒川村沿革誌』
- 櫻井 清彦 1958 「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』 東京大学出版会
- 北林八洲晴 1969 「青森県夏泊半島の製塙土器」『月刊考古学ジャーナル』38号
- 北林八洲晴 2003 『断章 青森の製塙跡考』
- 角川日本地名大事典編纂委員会 1985 『青森県地名大辞典』 角川書店
- 成田 澤彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 三浦 圭介 1992 「青森県における古代の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 古代城柵官衙遺跡検討会
- 齋藤 淳 2001 「津軽海峡領域における古代の土器の変遷について」『研究紀要』4 青森大学考古学研究所
- 窯跡研究会 1997 『古代の土師器生産と焼成遺構』 真陽社
- 葛西 勲 2002 『再葬土器棺墓の研究』

# 写 真 図 版



調査区全景東側（北→）



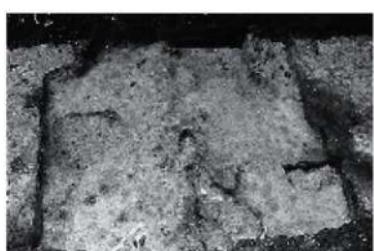
調査区全景西側（北→）



基本層序（西→）



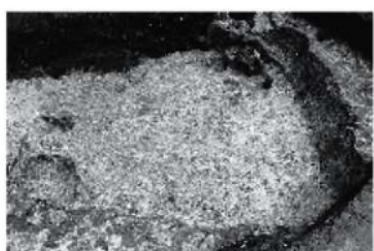
S I 01完掘（西→）



S I 02完掘（西→）



S I 03完掘（東→）



S I 04完掘（西→）



S I 04カマド（西→）

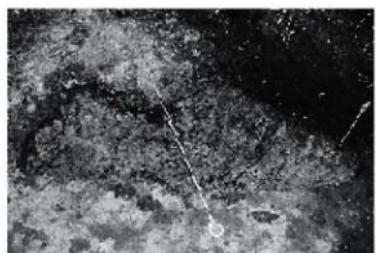
写真1 葛野（1）遺跡 検出遺構（1）



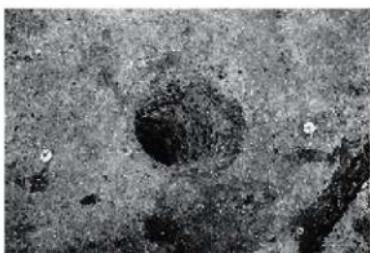
S I 05完掘（北→）



S I 06完掘（東→）



S K 01完掘（南→）



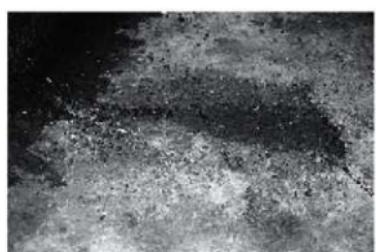
S P 01完掘（西→）



S P 02・03完掘（東→）



S P 04完掘（北→）



S P 07セクション（北→）

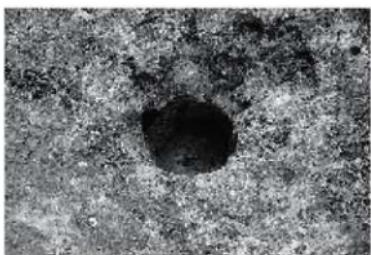


S P 08セクション（南→）

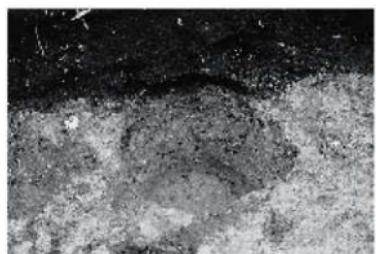
写真2 葛野（1）遺跡 検出遺構（2）



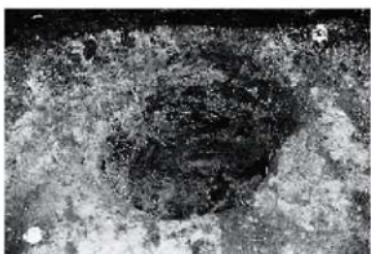
S P09完掘 (北→)



S P10完掘 (北→)



S P11完掘 (西→)



S P12完掘 (西→)



S P13完掘 (西→)



S D01セクション (東→)

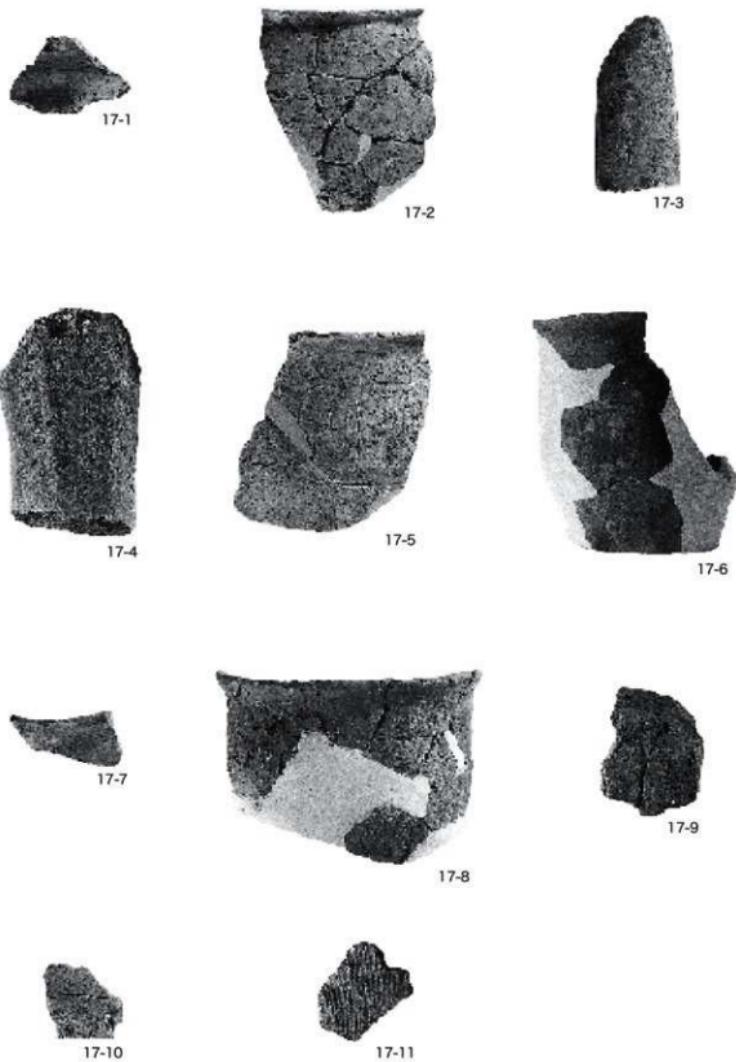


S D02完掘 (西→)



S D03・04完掘 (北→)

写真3 葛野（1）遺跡 検出遺構（3）



(S = 1/3)

写真4 葛野（1）遺跡 出土遺物（1）

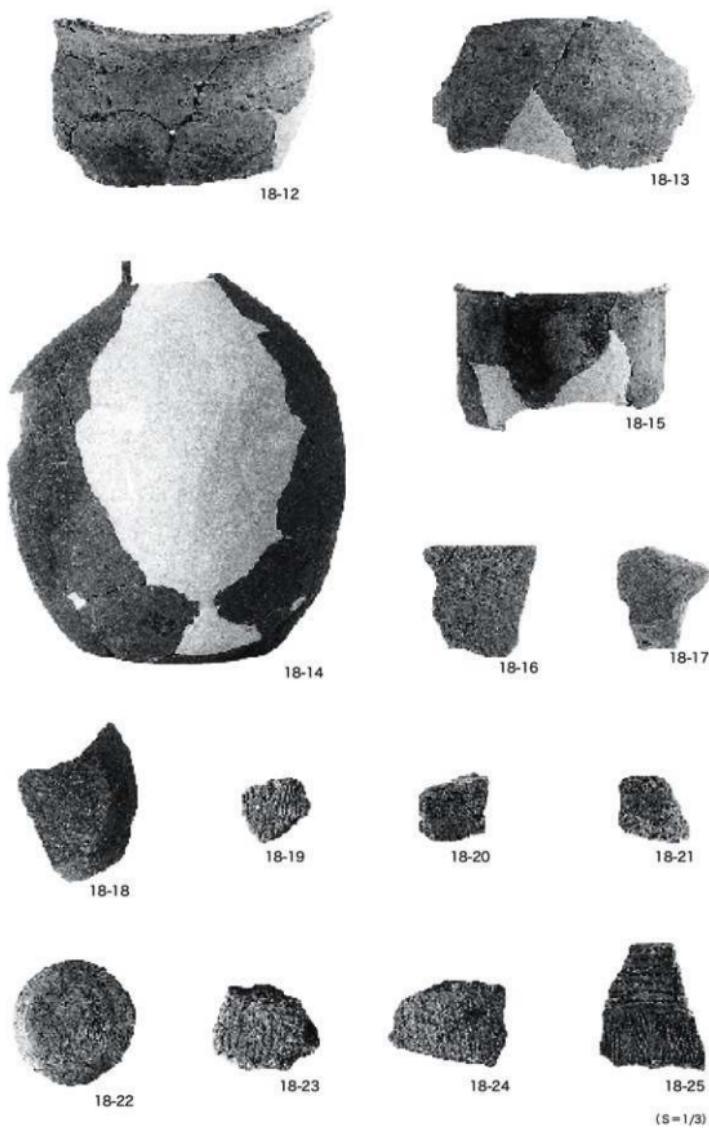
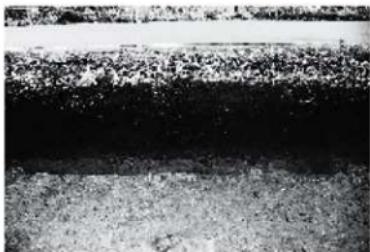


写真5 葛野（1）遺跡 出土遺物（2）



調査区全景（南→）



基本層序（東→）



S I 01完掘（北→）



S I 01カマド（北→）



S I 02完掘（北→）



S I 02カマド（北→）



S I 03完掘（北→）



S I 03カマド（北→）

写真6 葛野（2）遺跡 検出遺構（1）



SK01完掘（東→）



SK02完掘（東→）



SK03完掘（南→）



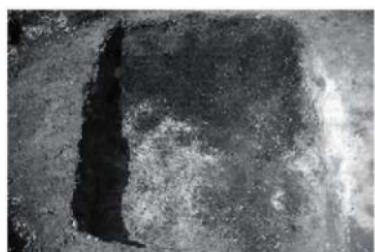
SK04・SP08完掘（東→）



SK05完掘（西→）



SK06完掘（西→）



SK07完掘（東→）



SD01完掘（東→）

写真7 葛野（2）遺跡 検出遺構（2）



S P01完掘（西→）



S P02完掘（西→）



S P03完掘（東→）



S P04完掘（南→）



S P05完掘（南→）



S P06完掘（東→）



S P09完掘（西→）



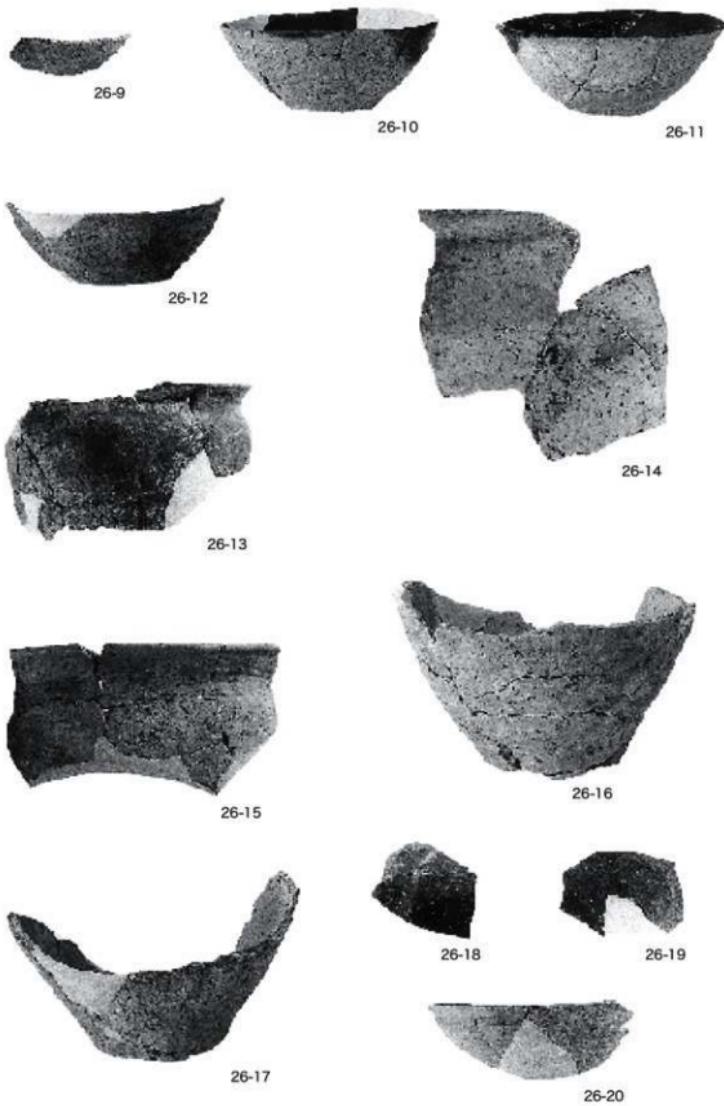
S P10完掘（西→）

写真8 葛野（2）遺跡 検出遺構（3）



(S = 1/3)

写真9 葛野（2）遺跡 出土遺物（1）



(S=1/3)

写真10 葛野(2)遺跡 出土遺物(2)



調査区全景A区（北→）



調査区全景B区（南→）



基本層序（西→）



S I 01窯（北→）



S I 01カマド（北→）



S I 01カマド火床面（北→）



S I 01Pit5~7（北→）



SK 03炭化物（南→）

写真11 葛野(3)遺跡 検出遺構(1)



SK04完掘（南→）



SK05完掘（北→）



SK06完掘（西→）



SK07完掘（南→）



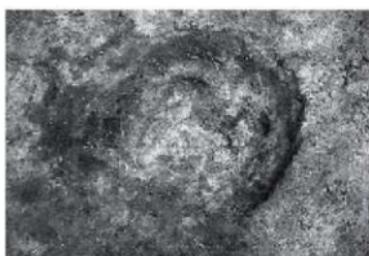
SN01完掘（南→）



SN02確認面（北→）



SP01完掘（西→）



SP02完掘（西→）

写真12 葛野（3）遺跡 検出遺構（2）



SP 04完掘（西→）



SP 05完掘（西→）



SP 06完掘（北→）



SP 07完掘（西→）



SP 10完掘（南→）



SP 11完掘（南→）



SD 01完掘（西→）

写真13 葛野（3）遺跡 検出遺構（3）

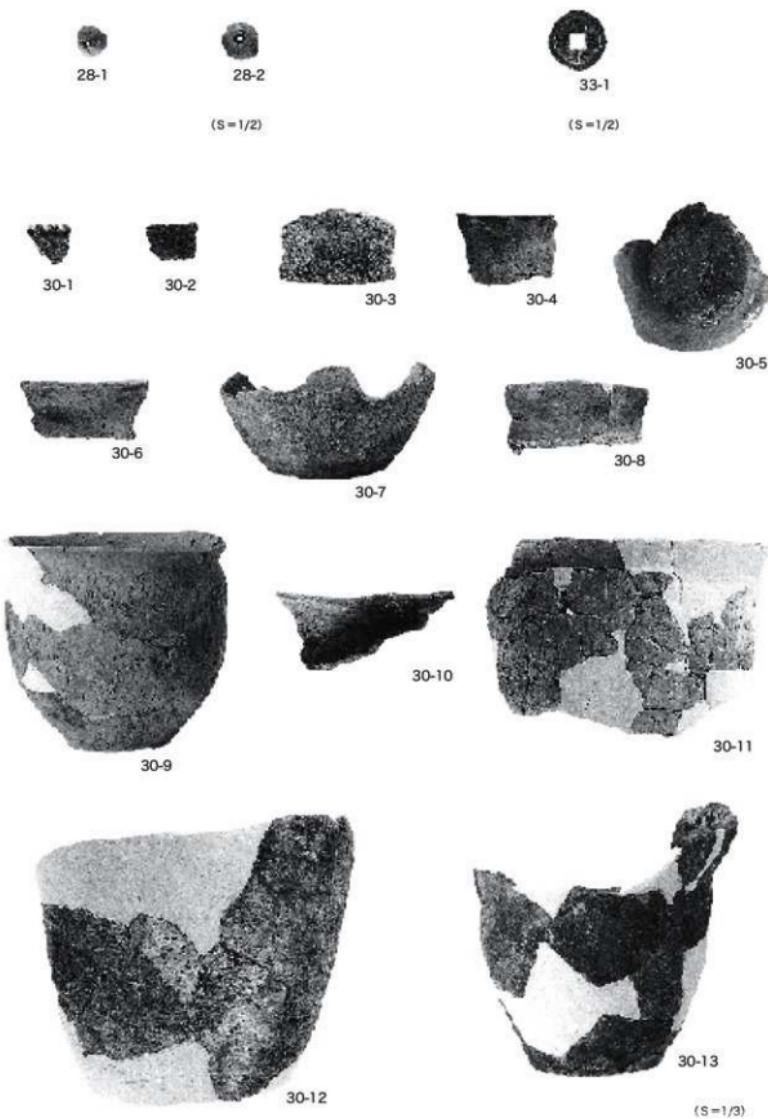


写真14 葛野（3）遺跡 出土遺物（1）

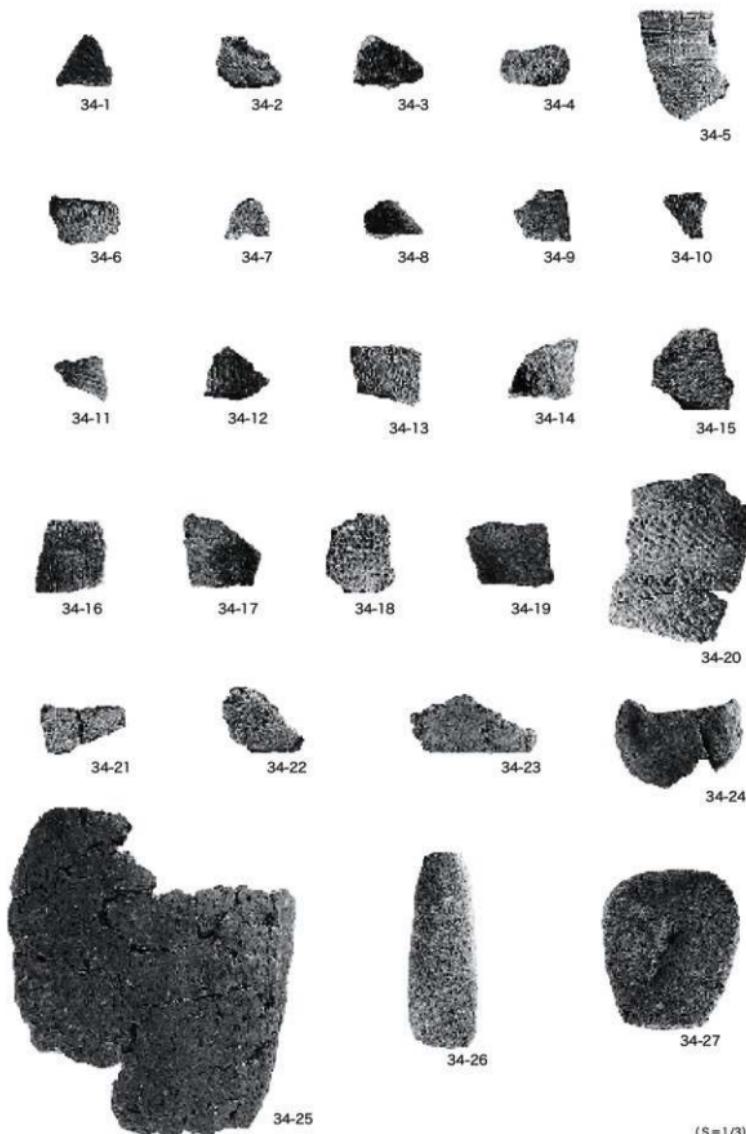


写真15 葛野（3）遺跡 出土遺物（2）

(S=1/3)

## 報告書抄録

ふりがな	くずのいせきぐんはつくつちょうさはうこくしょ
書名	葛野遺跡群発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	設楽政健、野坂知広、稻垣森太
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒038-8505 青森県青森市柳川二丁目1番1号 TEL017-761-4796
発行年月日	西暦2008年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		世界地図系		調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経				
葛野遺跡群	葛野(1)遺跡	青森県青森市大字 おおべつないあざくすの 大別内字葛野	02201	01217	40° 45' 26"	140° 43' 53"	20060912 20061027	589m <sup>2</sup>	道路改良工事に先立つ事前調査
	葛野(2)遺跡	青森県青森市大字 おおべつないあざくすの 大別内字葛野	02201	01218	40° 45' 9"	140° 44' 3"	20061030 20061130	711m <sup>2</sup>	道路改良工事に先立つ事前調査
	葛野(3)遺跡	青森県青森市大字 おおべつないあざくすの 大別内字葛野	02201	01308	40° 44' 44"	140° 44' 16"	20070925 20071106	2,887m <sup>2</sup>	道路改良工事に先立つ事前調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛野遺跡群	葛野(1)遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 土坑 小ピット 溝状遺構	6軒 1基 14基 4条
	葛野(2)遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 土坑 小ピット 溝状遺構	3軒 7基 10基 1条
	葛野(3)遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡 土坑 焼土遺構 小ピット 溝状遺構	1軒 7基 2基 11基 1条

要約	<p>1. 葛野遺跡群は、青森市南部に広がる火山性台地上、標高約50～80mの地点に位置している。</p> <p>2. 発掘調査は、市道金浜小畑沢線道路改良工事予定地内4,187m<sup>2</sup>（葛野（1）遺跡：589m<sup>2</sup>、葛野（2）遺跡：711m<sup>2</sup>、葛野（3）遺跡：2,887m<sup>2</sup>）を対象に実施した。</p> <p>3. 調査の結果、縄文時代および平安時代の遺構・遺物を検出した。集落跡の主体時期は、平安時代（10世紀初頭～前葉）である。</p>
----	--

## 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	年	題名	青森市埋蔵文化財調査報告書
〃 2	1962	『三内丸山遺跡調査概報』	〃 第51集 2000 『桜峯(1)・雪谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
〃 3	1965	『四ツ石遺跡調査概報』	〃 第52集 2000 『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
〃 4	1967	『玉清水遺跡調査概報』	〃 第53集 2000 『市内遺跡発掘調査報告書』
〃 5	1970	『三内丸山遺跡調査概報』	〃 第54集 2001 『新町野遺跡発掘調査報告書・II』
〃 6	1971	『野木知跡調査報告書』	野木遺跡発掘調査報告書II
〃 7	1971	『玉清水遺跡調査報告書』	『小牧野遺跡発掘調査報告書VI』
〃 8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』	『樺山遺跡発掘調査報告書I』
〃	1979	『蜜沢遺跡』	『樺山遺跡発掘調査報告書II』
〃	1983	『四戸城遺跡調査報告書』	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書II』
青森市の埋蔵文化財	1983	『山野寺遺跡』	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	1985	『長森遺跡発掘調査報告書』	『市内遺跡発掘調査報告書VII』
〃	1986	『田茂木遺跡発掘調査報告書』	『小牧野遺跡発掘調査報告書VIII』
〃	1987	『横内城跡発掘調査報告書』	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	1988	『三内丸山I遺跡発掘調査報告書』	『樺山遺跡発掘調査報告書II』
青森市埋蔵文化財調査報告書			『樺山遺跡発掘調査報告書III』
〃 第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	『樺山遺跡発掘調査報告書IV』
〃 第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	『樺山遺跡発掘調査報告書V』
〃 第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
〃 第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』	『近野遺跡発掘調査報告書』
〃 第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』	『市内遺跡発掘調査報告書II』
〃 第21集	1994	『市内遺跡発掘分布調査報告書』	『小牧野遺跡発掘調査報告書III』
〃 第22集	1994	『小三内丸山遺跡発掘調査報告書』	『樺山遺跡発掘調査報告書V』
〃 第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	『樺山遺跡発掘調査報告書VI』
〃 第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃 第25集	1995	『市内遺跡発掘分布調査報告書』	『市内遺跡発掘調査報告書12』
〃 第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』	『江渡遺跡発掘調査報告書』
〃 第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』	『宗山(3)遺跡発掘調査報告書』
〃 第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』	『赤坂遺跡発掘調査報告書』
〃 第29集	1996	『市内遺跡発掘分布調査報告書』	『三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』
〃 第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』	『市内遺跡発掘調査報告書13』
〃 第31集	1997	『市内遺跡発掘分布調査報告書』	『合子沢森(2)遺跡発掘調査概報』
〃 第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報II』	『石江遺跡群発掘調査概報』
〃 第33集	1997	『新町野遺跡発掘調査報告書』	『三内丸山(3)遺跡発掘調査報告書』
〃 第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』	『合子沢森(2)遺跡発掘調査概報II』
〃 第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書』	『新町野遺跡発掘調査概報II』
〃 第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』	『小牧野遺跡発掘調査報告書IX』
〃 第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』	『市内遺跡発掘調査報告書14』
〃 第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』	『新町野遺跡発掘調査報告書III』
〃 第39集	1998	『市内遺跡発掘分布調査報告書』	『史跡高城館遺跡環境整備報告書II』
〃 第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書田苗』	『原山遺跡発掘調査報告書』
〃 第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』	『月見野(1)遺跡発掘調査報告書』
〃 第42集	1998	『熊(2)遺跡発掘調査概報』	『市内遺跡発掘調査報告書15』
〃 第43集	1999	『市内遺跡発掘分布調査報告書』	『新町野遺跡発掘調査概報II』
〃 第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書II』	『合子沢森(2)遺跡発掘調査報告書』
〃 第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書V』	『石江遺跡群発掘調査報告書』
〃 第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』	『野尻(4)遺跡発掘調査報告書』
〃 第47集	1999	『樺山遺跡発掘調査概報』	『葛野(2)遺跡群発掘調査報告書』
〃 第48集	2000	『熊(2)遺跡発掘調査報告書』	『市内遺跡発掘調査報告書16』
〃 第49集	2000	『樺山遺跡発掘調査概報II』	『新町野遺跡発掘調査報告書II』
〃 第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書V』	

## 青森市埋蔵文化財調査報告書 第96集

### 葛野遺跡群発掘調査報告書

発行年月日 平成 20 年 3 月 31 日

発 行 青 森 市 教 育 委 員 会

〒038-8505 青森市柳川二丁目1番1号

TEL 017-761-4796

印 刷 青森オフセット印刷株式会社

〒030-0802 青森市本町二丁目11番16号

TEL 017-775-1431